

修 士 論 文

75.

聴覚障害児の言語発達に関する

縦断的研究

— 母子の会話の変化を通して —

平成5年度筑波大学大学院教育研究科

カウンセリング専攻リハビリテーションコース

914037

島根みな子

目 次

I. はじめに	
1. 聴覚障害児の言語発達に関する研究	1
2. 本研究の目的	7
II. 研究の方法	
1. 対象児	8
2. 分析の資料	
(1) 資料の決定	15
(2) 資料の整理	16
3. 分析の方法	
(1) 会話成立水準の分析	17
(2) 話題内容の分析	18
(3) 発話の分析	19
III. 結果	
1. 会話成立水準の変化	20
2. 話題内容の変化	26
3. 発話の変化	
(1) 発話数の変化	32
(2) 異なり語彙数の変化	38
(3) 発話長の変化	43
IV. 考察	
1. 全般的考察	49
2. 事例ごとの考察	58
V. まとめ及び今後の課題	68
文献	72
資料	76
謝辞	89

I. はじめに

1. 聴覚障害児の言語発達に関する研究

先天的に、または、言語獲得以前から聴覚に障害を持つ子どもは、その言語発達が阻害される。岡本（1982）は、聴覚障害児は、音が聞こえないために、聴覚中枢伝導路の発達が阻害されるのみならず、聴中枢における音の感受、言語中枢における音の感受、言語中枢における言葉の認識、知識の発達も阻害されると指摘している。そのため、聴覚障害児教育に於いては、発達初期が聴覚・音声と言語学習の最適期（Optimal Period）であるとして、補聴器の適切な選択と使用に基づく乳幼児期からの早期教育の重要性が指摘されている。今井（1989）は、「人間の発達は誕生以来、情緒的発達、知的発達、身体的発達、社会的発達のすべてが互いに関わりながら、それぞれの発達にたすけられ、導かれていくものであることを考えると、聴覚の発達も他の感覚を補助し、あるいは誘導し、すべての発達に支えられ、また支えて行く役割を持っているといえる。」とし、早期からの聴覚活用の重要性を説いている。年齢と共に聴覚的学習の能力が低下する事は、臨床的にも示されている（Lloyd, 1976）。

言語学習の最適期がいつかという事については多様な幅の意見がある。Lenneberg は2歳～12歳を言語獲得の臨界期（Critical Period）としている。Gezel（1940）は、反射的な発声から言語発達の基礎となる意図的な喃語に変わる時期である生後6か月が非常に重要な時期であると指摘している。近年、大脳生理学や医学の立場からは、幼児期が大脳の可塑性が高く、学習の効果が著しい時期なので、母国語の学習に最適の時期であると考えられている。中野（1991）は、この時期、脳は、重

量が変化するだけでなく、皮質ニューロンの密度が高くなり、各神経繊維のからまりが密接となり、皮質や白質の化学的構成が変化し、また、神経の髄鞘化が進行し、脳波など電気生理的变化も顕著になる事を指摘している。そして、これまでの聴覚障害児教育の成果と合わせて考えると、言語学習の最適期は、暫定的に0～4歳とするのが妥当であろうと主張している。また、古賀（1991）は、ことばや言語の習得は、人の脳の発達の最もピークな時期、0～4歳ごろが適しており、この時期から遅れると、ことばや言語の習得が困難となると指摘している。中野（1991）や古賀（1991）の指摘は、一般的に経験的に言語を身に付ける時期は3～4歳までにあるといわれている事と一致しており、言語獲得における幼児期の重要性が確認できる。

近年、これらの指摘を踏まえ、聾学校、難聴幼児通園施設、教育センター、保健センターやクリニックでは、聴覚障害児の早期教育に力を入れている。そして、現在、補聴器の早期装用と早期教育により、聴覚障害児も、ゆっくりとではあるが健聴児と同じような発達のプロセスで言葉を習得できるといわれている（Clark, 1989）。しかし、同じように早期から補聴器を装用し、教育を受けてきた聴覚障害児でも、そのことばの発達の速度には大きな個人差が見られる。その個人差は、例えば語彙力や構文力など、言語力そのものに関わる部分で現れるばかりでなく、対人的コミュニケーションの進め方、言語によって話し合える内容など言語による様々な活動の仕方に及ぶ事が多い。

健聴児の言語発達についても、認知的発達の面により説明しようとするだけでなく、言語の伝達機能を重視し、言語発達をコミュニケーション行動の中に位置付けて、非言語的手段も使う母子相互作用が言語発達的前提となるのだとする考え方が、1970年代後半から出てきた。

Trevarthenn (1979) は、生後12週の乳児を観察し、乳児は母親のからだの動きや表情に見事に同調しており、母親とのコミュニケーション能力があるとしている。山田(1980)は、乳児期後期(9～10か月)に、それ以前に独立であった人との関係性と物との関係性が結合されて、自己一人一物の3項を含む行動(三項関係)が成立すると指摘し、それが言語の前提条件であるとしている。このような研究の動向を長崎(1988)は、「従来の考え方を『言語からコミュニケーションへ』とすれば、この10数年の研究によってその命題は逆転され、『コミュニケーションから言語へ』と考えられるようになったと言っているだろう。」と説明している。

このように母子相互作用の重要性が指摘され、また聾学校における教育開始年齢が0～2歳台まで下降するにつれて、母親指導の意義はますます大きくなってきていると思われる。母子のコミュニケーションの基盤の上に有意味言語が獲得される事は聴覚障害児でも変わりなく、母子相互作用の過程は聴覚障害に元来ほとんど影響されるものではないはずであるが、現実には子どもの聴覚障害という事実を親が受け入れられなかったり、子どもが聴覚障害児であるために偏った接し方をすることにより母子相互作用に影響が出る場合もある。障害の早期発見、必要な補聴対策に加え、発達段階に適した偏りのない親や教師の対応が、聴覚障害児の言語獲得を確かにするために不可欠だといえる。そして、聴覚障害児教育に於いても、言語発達を言語力に関わる発達指標からだけとらえるのではなく、より広い言語活動の発達からとらえていく必要が主張されるようになってきている。言語力の獲得から対人的コミュニケーションに進むのではなく、様々な手段によるコミュニケーションの中で言語をどう育てるかが課題としてあらたに意識されるようになってきたので

ある。

このような観点から、聾学校における言語指導の方向性を考える指標として、斎藤（1988）は、言語発達を言語活動の段階的発達としてとらえた5つの段階を提唱している。そして、この段階のモデルは健聴児の言語活動の中からとらえたものだが、聴覚障害児の言語発達においても基本的にはその発達の筋道は変わらないのではないかと指摘している。以下にその内容を示す。

〔第1段階〕音、音声の意味を知りはじめ、また対話の基礎が形成される。（標準的言語発達では生後1年位までにできてくる言語活動）

〔第2段階〕生活の中で「いま、ここで」展開される事象や感情、行動などがことばによって表現できることを学び、言葉による対話も徐々に成立する。（標準的言語発達では生後1歳台から3歳台までにできてくる言語活動）

〔第3段階〕対話の量も相手も増えるとともに、具体的場面、行動を離れた言語活動も徐々に可能になる。言葉に対して意識的になってくる。（標準的言語発達では4歳ごろから小学校入学ごろまでにできてくる言語活動）

〔第4段階〕生活言語と学習言語が混在して使われる時期。学習の場では話しことばと書きことばが交錯し、話し言葉の中の学習言語的な部分が、書き言葉によって強化されてくる。（小学校低学年）

〔第5段階〕話し言葉にも知識伝達的なものが多くなり、学習の場では学習言語の使用が主流になる。メディアとしては書きことばの使用が日常的になり、質的に話し言葉を凌ぐようになる。（小学校高学年）

このうち斎藤（1988）は、第3段階までの言語発達が話し言葉の発達として基本的なもので、第4段階、第5段階は書き言葉との相互作用に

よって更に深められる発達と考えている。このような言語発達のモデルは提示されたが、教育開始が早く、補聴状態も良い聴覚障害児の場合は、実際にこのような段階的な言語発達を見られるのだろうか。もし、躓きがあるとすれば、それはどんな段階やどんな言語活動に現れて来るのだろうか。

聴覚障害児の言語発達を縦断的に分析することは、早期教育の効果や教育途上の躓きを明らかにする上で重要であり、更に、言語発達に個人差のある子供に対する親や教師の関わり方を考える上でも重要であると思われる。しかし、従来、家庭の日記や指導の記録から特定の子の言語発達を報告した研究や（田中，1973；庄司，1987；榎本・野中・中川・川野・中島，1988）、言語発達を語彙数や品詞、文節数といったいわゆる言語力面からのみ分析した研究（今井・星，1967；土井・前園・清水，1987；森，1992）が多く、子どもと母親或いは教師との間で会話がどのように成立するかという観点や、話し合える内容が発達的にどう変化して行くのかといった観点など、言語活動面から分析した研究はまだ少ない。

会話の成立について、渡海・高橋（1986）は、教育相談室内での聾幼児（4歳）の母子コミュニケーションをVTRで記録し、コミュニケーション手段、発話の機能、応答の確認、コミュニケーションの成立について分析している。その結果、コミュニケーションの成立については、母親は子どもからの発信を9割以上受信しているが、子どもは母親からの発信を6割程度しか受信していないと指摘している。また、松本・椿（1989）は、聴覚障害幼児の母親との対話と、教師との対話をそれぞれVTR録画し、コミュニケーションの成立について分析している。分析に当たっては、後藤（1976）が9名のダウン症候群の幼児の、プレイル

ームにおける母子相互交渉場面の分析に使った、母子言語関係の成立水準を利用している。その結果、母子間のコミュニケーションよりも、教師子ども間のコミュニケーションの方が活発であり、会話が多く成立している事が明らかになった。

子どもと教師の間の会話における話題内容について研究したものとしては、聾学校の4歳児クラスの授業における話題内容の変化を分析した中馬（1989）の研究が挙げられる。それによると、1学期は「目の前の場面」と「生活経験」に関する話題で占められていたのだが、2学期になると「目の前の場面」に関する話題が減り、「生活経験」に関する話題が半数以上を占めるようになり、「想像・空想」に関する話題も現れてきていることが分かった。

しかし、以上のような研究は幼児期の一時期に焦点を当てた研究であり、乳幼児期から小学部低学年にかけてというような、長期間の言語発達を研究したものではない。また言語活動面と言語力面との関連は明らかにされていない。教育現場にある教師や親にとって、より総合的で長期の聴覚障害児の言語発達の様相を明らかにする事が、必要であると思われる。

2. 本研究の目的

前節で見てきたように、聴覚障害児の言語発達に関する研究は、獲得された言語力の評価に重点を置く研究が多く、言語活動というより広い観点から見た場合、早期に補聴器を装用し、早期教育を開始した聴覚障害児が実際どのように言語発達を遂げているのか、健聴児と似た段階的発達が認められるのか等については、まだ客観的に明らかにされていない状態である。

本研究では、聴覚障害児の乳幼児期から小学部低学年（9歳）までといった比較的長期の言語発達を、事例を通して会話成立水準の変化や話題内容の変化といった言語活動面と、発話（発話数、異なり語彙数、発話長）の変化といった言語力面の両面から分析し、聴覚障害児のことばの発達の様相を段階的に明らかにする事を、第1の目的とする。方法としては、長期に亘る母子会話資料の分析による。また、各事例の言語発達上の特徴や問題点について考察し、特に言語活動の発達と言語力の発達の両面において問題があると思われる事例については、発達上の躓きの時点、そこでの問題点について分析し、親や教師の望ましい関わり方について考察することを、合わせて目的とする。

Ⅱ．研究の方法

1．対象児

対象児はN聾学校に乳幼児期から小学3年生まで在籍した聴覚障害児4名である（現在小学5年生）。いずれも先天性の聴覚障害で重複障害はない。対象児は同じクラスに在籍し、特にその教育方法に大きな差はない。

（1）A児

1982年10月生れ。女児。

①生育歴・教育歴

生下時体重 2,818 g。歩行開始1歳1か月。

1か月…大きい音に驚かないため、難聴に気付く。

3か月…N病院小児科を受診。

1歳2か月…T大学付属病院耳鼻科において、難聴と診断される。

1歳3か月…S医大病院耳鼻科において、難聴と診断される。

T大学付属病院耳鼻科ホームトレーニング。

1歳4か月…補聴器を片耳装用。

1歳4か月～9歳5か月…N聾学校で教育を受ける。補聴器を両耳装用にする。

9歳6か月…普通小学校に転出する。

②聴力

平均聴力レベル 右94 dB、左99 dB。（1991.7.18 測定。）

図1-1に聴力図を示す。

平均聴力レベル

右 : 94 dB

左 : 99 dB

右 : ○—○

左 : ×---×

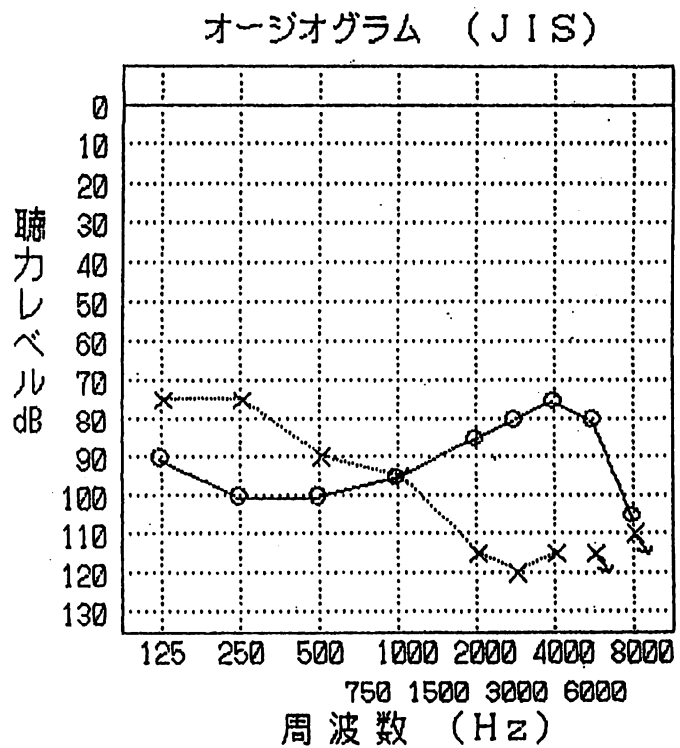


図 1 - 1 A 児 聴力図

③家族の状況

父（会社員）、母（専業主婦）、本児、妹 2 人。家族は全員健聴者である。

(2) B 児

1982 年 11 月生れ。女兒。

①生育歴・教育歴

生下時体重 3,150 g。歩行開始 1 歳 2 か月。

10 か月…音に反応しないので、難聴に気付く。

T 大学付属病院耳鼻科を受診し、難聴と診断される。

11 か月…補聴器を片耳交互装用。

1 歳 2 か月…S 聾学校教育相談。

1 歳 7 か月～9 歳 4 か月…N 聾学校で教育を受ける。補聴器を両耳装用

にする。

9歳5か月…普通小学校に転出する。

②聴力

平均聴力レベル 右106 dB、左125 dB。(1991.7.17 測定)

図1-2に聴力図を示す。

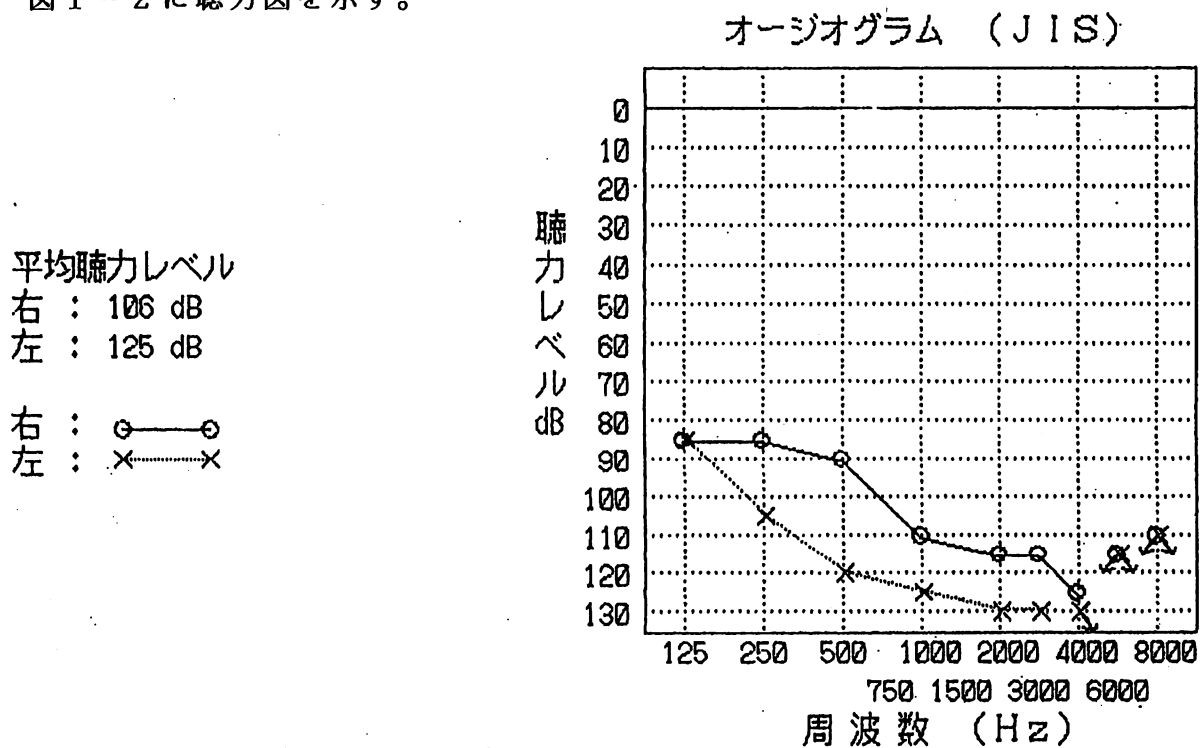


図1-2 B児 聴力図

③家族の状況

父(会社員)、母(専業主婦)、兄2人、本児、妹。家族は全員健聴者である。

(3) C児

1982.12.6 生れ。女児。

①生育歴・教育歴

生下時体重 2.890 g。歩行開始10か月。

1歳…名前を呼んでも振り向かないため難聴に気付く。

1 歳 2 か月… T 医大第 2 病院で受診し、難聴と診断される。

1 歳 5 か月… S 聾学校 T 分校で教育相談を受ける。

T センターで補聴器を交互装用にする。

1 歳 6 か月… 私立の指導教室に月 1 回通う。

2 歳 5 か月～ 8 歳 3 か月… N 聾学校で教育を受ける。補聴器を両耳装用にする。

8 歳 4 か月… 普通小学校に転出する。

② 聴力

平均聴力レベル 右 1 0 9 dB、左 1 0 9 dB。(1991.7.17 測定。)

図 1-3 に聴力図を示す。

平均聴力レベル

右 : 109 dB

左 : 109 dB

右 : ○—○

左 : ×—×

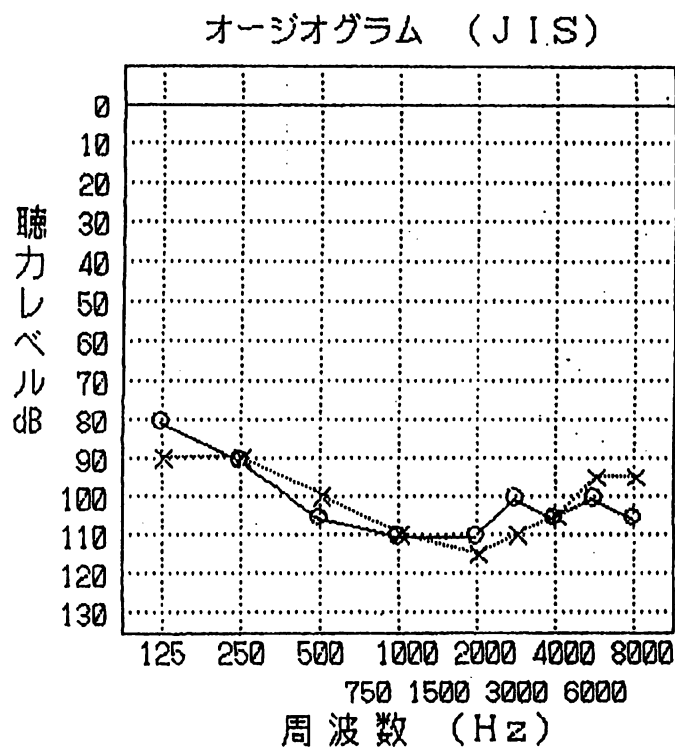


図 1-3 C 児 聴力図

③ 家族の状況

父 (会社員)、母 (専業主婦)、本児、双子の弟。弟の 1 人も聴覚障害である。

(4) D児

1982年3月生れ。女児。

①生育歴・教育歴

生下時体重 3,020 g。歩行開始1歳2か月。

1歳5か月…呼んでも反応がないので近所の耳鼻科に見せるが、もう少し様子を見てといわれる。

1歳9か月…Tリハビリテーションセンターで高度難聴と診断される。

補聴器を装用し、指導を受ける。

3歳0か月～…N聾学校で1年降年して教育を受け、現在に至る。

②聴力

平均聴力レベル 右105 dB、左98 dB。(1991.7.17 測定。)

図1-4に聴力図を示す。

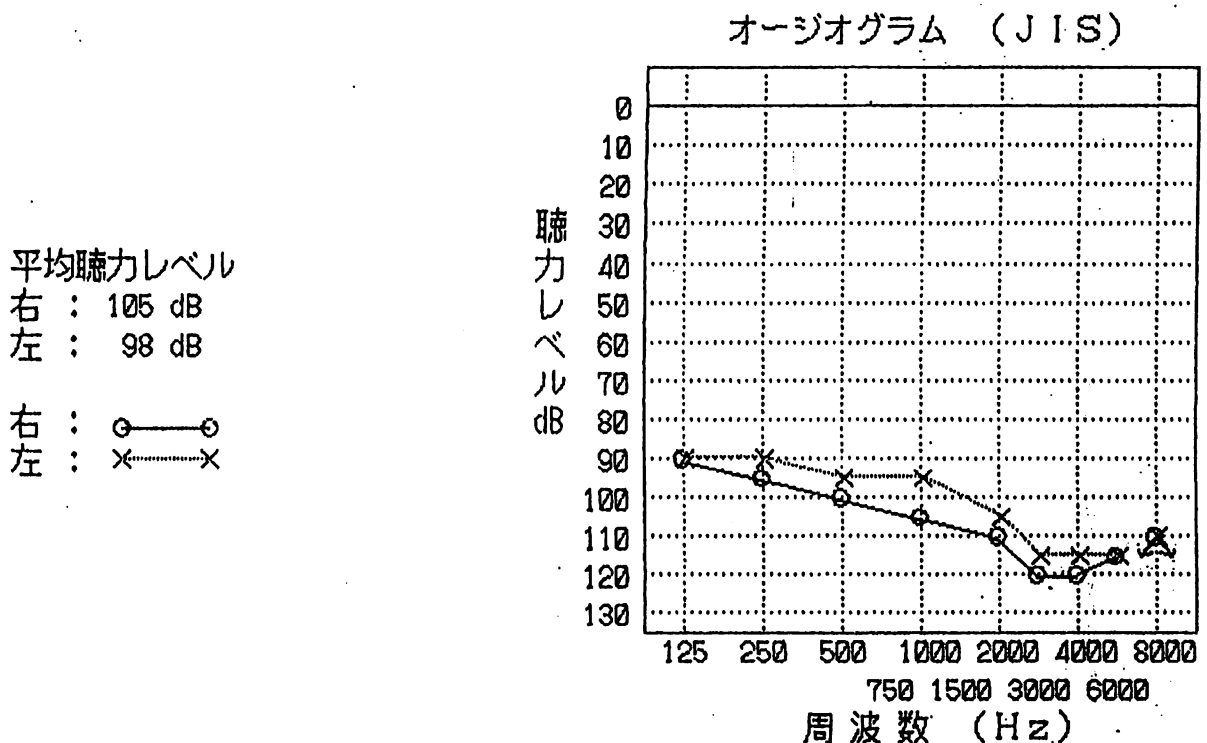


図1-4 D児 聴力図

③家族の状況

父（会社員）、母（専業主婦）、姉2人。家族は全員健聴者である。

尚、対象児の知能検査結果（1988年10月～11月実施）を表1に示す。
知能検査はW P P S I 知能診断検査の動作性検査と、コロンビア知的能力検査を行った。いずれも、非言語性の検査である。また、対象児の教
研式学力検査の国語と読書力検査による文字言語力（9歳時）を表2に
示す。

表1 対象児の知能検査結果（1988年10月～11月実施）

対象児	W P P S I（動作性検査）							コロンビア知的能力検査		
	実施年齢	動物の家	絵画完成	迷路	幾何模様	積木模様	P I Q	実施年齢	発達年齢段階	年齢偏差得点
A児	6：01	8	11	15	9	12	107	6：01	5歳後	99
B児	5：11	10	14	15	10	8	110	5：11	5歳前	97
C児	5：11	10	7	15	10	10	103	5：11	3歳後	71
D児	6：07	11	9	15	13	13	117	6：07	5歳前	90

表2 対象児の文字言語力（9歳時）

対象児	教研式学力検査（国語）			標準読書力診断テスト BⅡ型（金子書房）						
	総点	偏差値	評価段階	語の認知	文の理解	節の理解	漢字の読み	総得点	偏差値	評価段階
A児	50	49	3	49	47	56	74	226	51	3
B児	55	53	3	42	40	40	72	194	41	2
C児	59	56	4	36	39	54	70	199	43	2（+）
D児	23	28	1	18	27	30	70	145	26	1

2. 分析の資料

(1) 資料の決定

資料として、家庭での自由場面（遊び、食事、寝る前、等）の母子の会話のカセットテープを用いる。このカセットテープは、指導の参考として入学時よりほぼ毎年母親に録音、提出してもらったものである。提出してもらったカセットテープのうち、1番最初のテープ（1歳時或いは2歳時）から9歳時のテープまでを選び、各年につき1本、できるだけ録音日の近いものを選んで対象とする。但し、5歳時については資料が得られなかった。対象資料の一覧は表3に示す。テープの長さは30分テープないし60分テープである。このうち最初の15分間を抽出した。

表3 資料として用いたカセットテープ（録音時の対象児の暦年齢を示す）

A児	B児	C児	D児
1歳7か月 2歳3か月 3歳2か月 4歳3か月 6歳4か月 7歳3か月 8歳3か月 9歳3か月	1歳9か月 2歳2か月 3歳2か月 4歳3か月 6歳3か月 7歳1か月 8歳1か月 9歳1か月	2歳7か月 3歳3か月 4歳3か月 6歳3か月 7歳1か月 8歳1か月 9歳1か月	2歳10か月 3歳11か月 4歳11か月 6歳11か月 7歳9か月 8歳9か月 9歳9か月
計8本	計8本	計7本	計7本

(2) 資料の整理

カセットテープに録音した母子の発話を再生し、文字化して表記した。状況の分かるものについては状況を付記した。その際、以下の原則に従った。

- ①子どもの発話は、清水・八木（1975）、藤田・草薙（1989）、対馬（1992）を参考に、構音等が不明瞭であったり不正確であっても、場面状況や前後の発話により意味理解が可能なものは、意味機能の上から再生表記した。例えば、音声的には「オッアーイ」となっている、「ちょうだい」と言おうとしていると判断できる場合は「オッアーイ（ちょうだい）」と表記し、了解可能語とした。
- ②不明瞭な発話については聾学校教員1名と一緒に聞いてもらい、判断の一致のあった発話のみ取り上げた。
- ③A～C児の乳幼児期の発声並びに発音の不明瞭状態の続いたD児の全時期の発声については、母親にテープを書きおこしてもらい、必要に応じて参考にした。
- ④各発話の単位は、了解可能発話については、村田・大原（1965）、清水・八木（1975）の研究を参考に、ポーズ（pause）を手掛かりに、「一息の音声」を1単位とした。一部了解可能発話並びに了解可能発話については、ポーズ（pause）及び意味のつながりを手掛かりに1単位を決定した。

3. 分析の方法

整理した資料について、以下の3つの観点から分析を行う。

(1) 会話成立水準の分析

母子の会話を内容のまとまりごとに区切り、会話成立水準により分類し、分析する。分類カテゴリーは、後藤ら（1976）によるカテゴリー、星ら（1986）のコミュニケーションパターンの類型を参考として作成した。表4に分類カテゴリーを示す。尚、歌を歌ったり、本を一人で読み上げたり、お祈りをしている発話は、会話ではないとして、分類対象から外した。

表4 会話の成立水準分類カテゴリー
M: 母親 C: 子ども

会話未成立型	1型	M → C	母親のことばに子どもが応じていない
	2型	C → M	子どもの不完全なことばや発声に母親が応じていない
会話成立しかけ型 (2往復まで)	3型	M ⇄ C	母親のことばに子どもは不完全なことば、発声、口声模倣で応ずるがやりとりとして長続きしない
	4型	C ⇄ M	子どもの不完全なことば、発声に母親は応じたり拡充模倣するが、やりとりとして長続きしない
会話成立型 (2. 5往復～ 6往復まで)	5型	M ⇄ C	母親から会話が始まり、母親の拡充模倣や子どもの口声模倣を含みつつ、ある程度やりとりが続く
	6型	C ⇄ M	子どもから会話が始まり、母親の拡充模倣や子どもの口声模倣を含みつつ、ある程度やりとりが続く
会話持続型 (6. 5往復以上)	7型	M ⇄ C	母親から会話が始まり、母親の拡充模倣や子どもの口声模倣を含みつつ、やりとりが持続する
	8型	C ⇄ M	子どもから会話が始まり、母親の拡充模倣や子どもの口声模倣を含みつつ、やりとりが持続する
会話成熟型 (往復数に 関わらない)	9型	M ⇄ C	母親から会話が始まり、母親の拡充模倣や子どもの口声模倣なしにやりとりが続く
	10型	C ⇄ M	子どもから会話が始まり、母親の拡充模倣や子どもの口声模倣なしにやりとりが続く

注) 表中、「拡充模倣」とは、母親が子どもの不完全な表現を、正しい表現やより整った表現の形にして模倣することを指す。「口声模倣」とは、ことばを音声のみならず、口型や舌の動きにも注目して模倣することを指す。

カテゴリーへの分類の信頼性については、この分類カテゴリーを用いて2名の対象児について、隔年に各4本のカセットテープを抽出し、2名（著者と聾学校教員）が独立に分類を行ったところ、91.0%の一致率を得た。

（2）話題内容の分析

母子の会話を話題内容ごとに区切り、分類する。分類カテゴリーは、中馬（1989）の研究の分類カテゴリーを参考にして、作成した。表5に分類カテゴリー及びその内容を示す。

表5 話題内容の分類カテゴリー及びその内容

カテゴリー		内容
目の前の場面		目の前にあるおもちゃ（それを使っての見立て遊びを含む）や、絵本・絵カードの絵そのもの、食べているもの、着ているもの、体（顔、怪我したところ、補聴器など）について話す。
生活経験	現在	今、目の前にない物、人について話す。
	過去	自分のしたこと、見たことなどについて話す。
	未来	近未来の自分の予定について話す。明日、〇月〇日、〇月になったらの話であり、大きくなったらといった将来の話は含まない。
知識・想像	知識	ある内容について興味を持って尋ねたり、自分の持っている知識を伝えたり、論理的に説明したりする知的会話全般を指す。自分の経験を一部含む場合も、あるテーマにまとめられるようなものはここに分類する。 ＜例＞手品の説明、計算、薬の効用、地図の説明、天皇陛下の話、石炭・石油の話、スキーはどうやるか
	想像	想像や仮定の話、作話などを指す。 ＜例＞夢の話、大きくなったら何になりたい、もしも妹が生まれたら、自分の考えた漫画、本の登場人物についてお化けの話

カテゴリーへの分類の信頼性については、会話成立水準の分類と同様に、2名の対象児について隔年に各4本のカセットテープを抽出し、2名で独立に分類を行ったところ、82.5%の一致率を得た。

(3) 発話の分析

発話数、異なり語彙数、発話長について分析する。

① 発話数の分析

各対象児の発話を了解不能発話、一部了解不能発話、了解可能発話に分類して計数し、全発話数を求める。

② 異なり語彙数の分析

了解可能発話中の、異なる語彙を計数する。その際、掛け声・挨拶・定型、オノマトペ、自立語（名詞、動詞、接続詞、その他）、付属語（助詞、助動詞）に分類して計数する。

③ 発話長の分析

発話長は、文節単位で計量し、平均発話長を求める。その際、以下の原則に従う。

- ・ 相槌及び聞き返し（例 うん。えっ。そう。）は別途分類し、平均発話長の計算からは除外する。但し、聞き返しでも意味のある聞き返しのことば（例 何？何を？）は1語文に含める。
- ・ 1語文は単語のみと単語＋付属語では、言語レベルに差があると考えられるため、別々に計数する。
- ・ 語連鎖（例 ニャンニャン、ワンワン。1、2、3、4、5。）は、文節単位で計数できないので、独立に計数する。

Ⅲ．結果

1．会話成立水準の変化

各対象児について、母親との会話を会話成立水準分類カテゴリー（表 4）に基づいて分類した。A～D 児それぞれの各会話成立水準に分類された会話の総時間数を、表 6－1 から表 6－4 に示す。カテゴリーごとの会話持続時間の計量に当たっては、5 秒を単位として計量した。全体で 15 分を分析しているが、表中、時間数の合計が 15 分を越えるものがある。これは会話未成立型の 1 型および 2 型については一方通行の会話のため同時に話されることがあり、二重に計量されているからである。

表 6 - 1 A 児 会話成立水準別時間数

A 児		1 歳 7 か月	2 歳 3 か月	3 歳 2 か月	4 歳 3 か月	6 歳 4 か月	7 歳 3 か月	8 歳 3 か月	9 歳 3 か月
会話未成立型	1 型	12分30秒	12分35秒	2分35秒		5秒			
	2 型	3分15秒	1分35秒	30秒					
会話成立 しかけ型	3 型	1分 5秒	1分30秒	1分35秒	55秒				
	4 型	1分10秒	1分 5秒	1分30秒	15秒				
会話成立型	5 型			2分 5秒	20秒				
	6 型			1分30秒					
会話持続型	7 型				13分 5秒				
	8 型								
会話成熟型	9 型					9分20秒	12分15秒	3分45秒	5分15秒
	10型					55秒	1分20秒	9分25秒	6分40秒

表 6 - 2 B 児 会話成立水準別時間数

B 児		1 歳 9 か月	2 歳 3 か月	3 歳 2 か月	4 歳 3 か月	6 歳 3 か月	7 歳 1 か月	8 歳 1 か月	9 歳 1 か月
会話未成立型	1 型	12分40秒	12分	7分15秒					
	2 型	1分10秒	3分	2分15秒					
会話成立 しかけ型	3 型	10秒	1分	2分30秒	30秒				
	4 型	1分30秒	1分30秒	1分20秒	10秒				
会話成立型	5 型			2分30秒	2分55秒				
	6 型			25秒	4分20秒				
会話持続型	7 型				1分 5秒	1分45秒			
	8 型				3分 5秒				
会話成熟型	9 型					6分30秒	9分30秒	2分 5秒	5分45秒
	10型					5分15秒	2分10秒	9分30秒	6分10秒

表 6 - 3 C児 会話成立水準別時間数

C児		2歳7か月	3歳3か月	4歳3か月	6歳3か月	7歳1か月	8歳1か月	9歳1か月
会話未成立型	1型	8分20秒	5分15秒					
	2型	1分 5秒	3分45秒					
会話成立 しかけ型	3型	1分15秒	1分55秒					
	4型	2分 5秒	2分	1分				
会話成立型	5型		35秒					
	6型		1分20秒					
会話持続型	7型			4分				
	8型			9分45秒	1分55秒			
会話成熟型	9型						5分 5秒	2分50秒
	10型				12分45秒	14分40秒	9分40秒	12分 5秒

表 6 - 4 D 児 会話成立水準別時間数

D 児		2 歳10か月	3 歳11か月	4 歳11か月	6 歳11か月	7 歳 9 か月	8 歳 9 か月	9 歳 9 か月
会話未成立型	1 型	5分35秒	3分50秒	5分20秒	50秒	1分 5秒	5秒	
	2 型	2分50秒	2分30秒	1分50秒	20秒	55秒		
会話成立 しかけ型	3 型	1分25秒	3分25秒	1分35秒	1分10秒	55秒	35秒	
	4 型	3分10秒	4分10秒	4分25秒	2分10秒	1分 5秒		
会話成立型	5 型		25秒	40秒	2分50秒	2分45秒	1分15秒	
	6 型			20秒	3分20秒	1分55秒	2分 5秒	
会話持続型	7 型				2分40秒	1分20秒	9分50秒	14分25秒
	8 型				1分25秒			
会話成熟型	9 型							
	10型							

各成立水準中、奇数番は母親からの開始、偶数番は子どもからの開始である。A～C児では2歳までは1型の、母親から始まる会話未成立型が中心である。時間数の合計が15分を越えるものもあり、母親や子どもの発話が、一方通行で相手に関係なくされている事が分かる。3歳になると会話未成立型、会話成立しかけ型、会話成立型（1～6型）に会話の成立水準が分散する。4歳では会話未成立型がなくなり、会話持続型が大きな割合で現れている。6歳になると、会話成熟型がほとんどになり、以後9歳まで会話成熟型が続く。会話成熟型の中でも、A児、B児では6歳、7歳では9型の母親からの開始が多く、8歳、9歳になると、10型の子どもからの開始が多くなっている。C児では6歳から子どもからの開始の10型が多い。

D児では4歳まで会話未成立型がかなりの割合で見られ、割合は減るが、8歳まで会話未成立型が残っている。また、A～C児では、はじめは1型の母親から始まる会話未成立型が非常に多いのに比べ、D児では1型が少ない。会話持続型は6歳時に現れるが、会話持続型が中心ではなく、6歳時及び7歳時は会話未成立型、会話成立しかけ型、会話成立型、会話持続型（1～8型）に分散した形になっている。8歳時、9歳時には会話持続型が中心になるが、会話成熟型は最後まで見られない。また、会話持続型の中でもほとんどが7型の母親からの開始のもので、8型の子どもからの開始のものはあまり見られない。

2. 話題内容の変化

各対象児について、母親との会話を話題内容ごとに区切り、表5のカテゴリーに従い分類した。話題内容ごとに、話された総時間数と話題全体に占める割合（時間比）について、A～D児の結果を表7-1から7-4に示す。また、話題全体に占める、目の前の場面、生活経験、知識・想像の3つの大項目の割合（時間比）について、A～D児の結果を図2-1から図2-4に示す。話題内容ごとの総時間数の計量に当たっては、会話成立水準と同様に5秒単位で計量した。

表 7 - 1 A 児 話題内容別時間数及び時間比

A児	目の前の場面	生 活 経 験			知 識 ・ 想 像		合 計
		現 在	過 去	未 来	知 識	想 像	
1歳7か月	135秒(100%)						135秒(100%)
2歳3か月	155秒(100%)						155秒(100%)
3歳2か月	320秒(75.0%)	80秒(25.0%)					400秒(100%)
4歳3か月	140秒(16.0%)	275秒(31.4%)	360秒(41.2%)	100秒(11.4%)			875秒(100%)
6歳4か月	45秒(7.3%)	235秒(38.2%)	260秒(42.3%)	75秒(12.2%)			615秒(100%)
7歳3か月					365秒(44.8%)	450秒(55.2%)	815秒(100%)
8歳3か月	145秒(18.4%)	55秒(6.9%)		50秒(12.2%)	540秒(68.4%)		790秒(100%)
9歳3か月	135秒(18.0%)				615秒(82.0%)		750秒(100%)

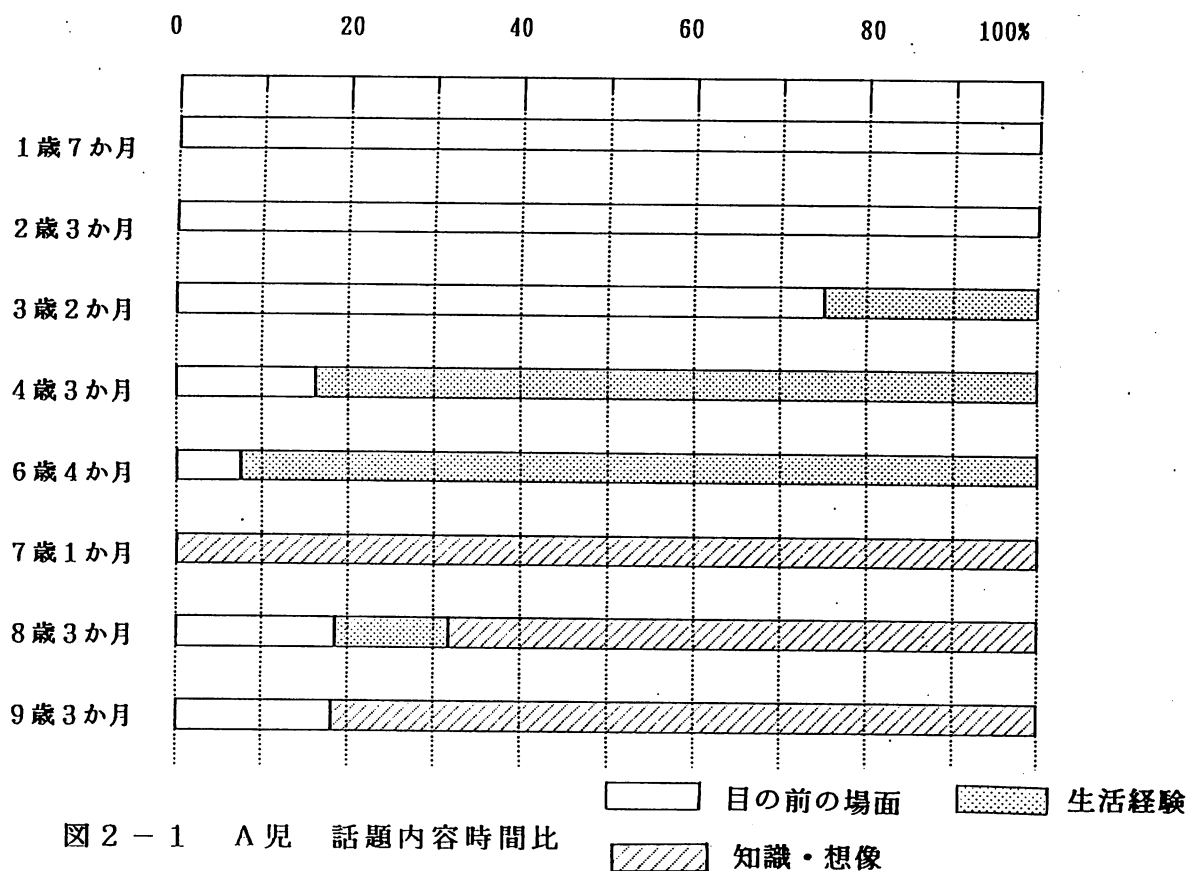


表 7 - 2 B 児 話題内容別時間数及び時間比

B 児	目の前の場面	生 活 経 験			知 識 ・ 想 像		合 計
		現 在	過 去	未 来	知 識	想 像	
1 歳 9 か月	100 秒 (100%)						100 秒 (100%)
2 歳 3 か月	150 秒 (100%)						150 秒 (100%)
3 歳 2 か月	400 秒 (98.8%)	5 秒 (1.2%)					405 秒 (100%)
		5 秒 (1.2%)					
4 歳 3 か月	310 秒 (42.8%)	415 秒 (57.2%)					725 秒 (100%)
		320 秒 (44.1%)	30 秒 (4.1%)	65 秒 (9.0%)			
6 歳 3 か月	15 秒 (1.8%)	335 秒 (41.4%)			460 秒 (56.8%)		810 秒 (100%)
		55 秒 (6.8%)		280 秒 (34.6%)	460 秒 (56.8%)		
7 歳 1 か月	25 秒 (3.6%)				675 秒 (96.4%)		700 秒 (100%)
					540 秒 (77.1%)	135 秒 (19.3%)	
8 歳 1 か月	70 秒 (10.1%)	340 秒 (48.9%)			285 秒 (41.0%)		695 秒 (100%)
		215 秒 (30.9%)	90 秒 (13.0%)	35 秒 (5.0%)	285 秒 (41.0%)		
9 歳 1 か月		75 秒 (10.5%)			640 秒 (89.5%)		715 秒 (100%)
			75 秒 (10.5%)		485 秒 (67.8%)	155 秒 (21.7%)	

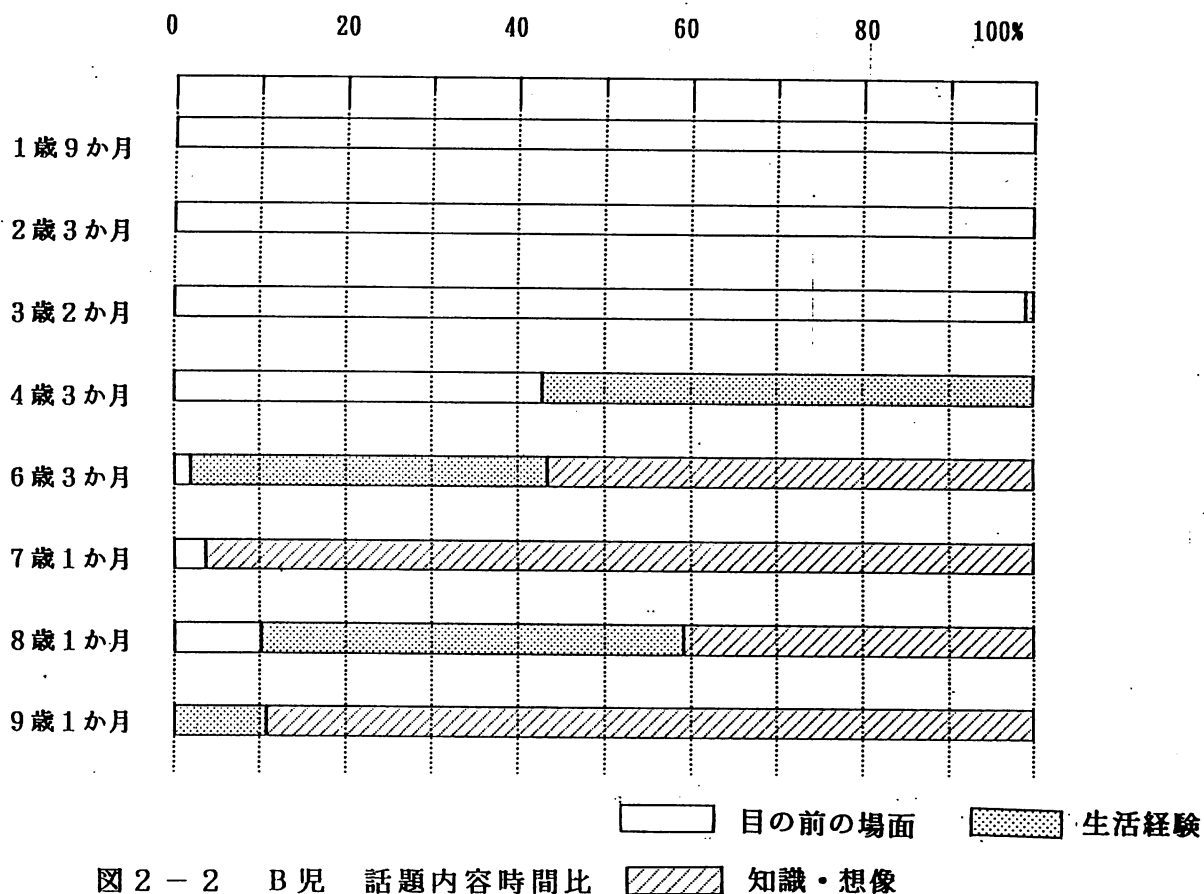


図 2 - 2 B 児 話題内容時間比

表 7 - 3 C 児 話題内容別時間数及び時間比

C 児	目の前の場面	生 活 経 験			知 識 ・ 想 像		合 計
		現 在	過 去	未 来	知 識	想 像	
2歳7か月	200秒(100%)						200秒(100%)
3歳3か月	315秒(90%)	35秒(10%)					350秒(100%)
		35秒(10%)					
4歳3か月	60秒(6.8%)	470秒(53.1%)			355秒(40.1%)		885秒(100%)
		345秒(39%)	125秒(14.1%)			355秒(40.1%)	
6歳3か月		375秒(42.6%)			505秒(57.4%)		880秒(100%)
			115秒(13.1%)	260秒(29.5%)	430秒(48.9%)	75秒(8.5%)	
7歳1か月	10秒(1.1%)	110秒(12.5%)			760秒(86.4%)		880秒(100%)
		110秒(12.5%)			475秒(54%)	285秒(32.4%)	
8歳1か月		510秒(57.9%)			370秒(42.1%)		880秒(100%)
			375秒(42.6%)	135秒(15.3%)	230秒(26.1%)	140秒(16%)	
9歳1か月		170秒(19%)			725秒(81%)		895秒(100%)
			170秒(19%)		725秒(81%)		

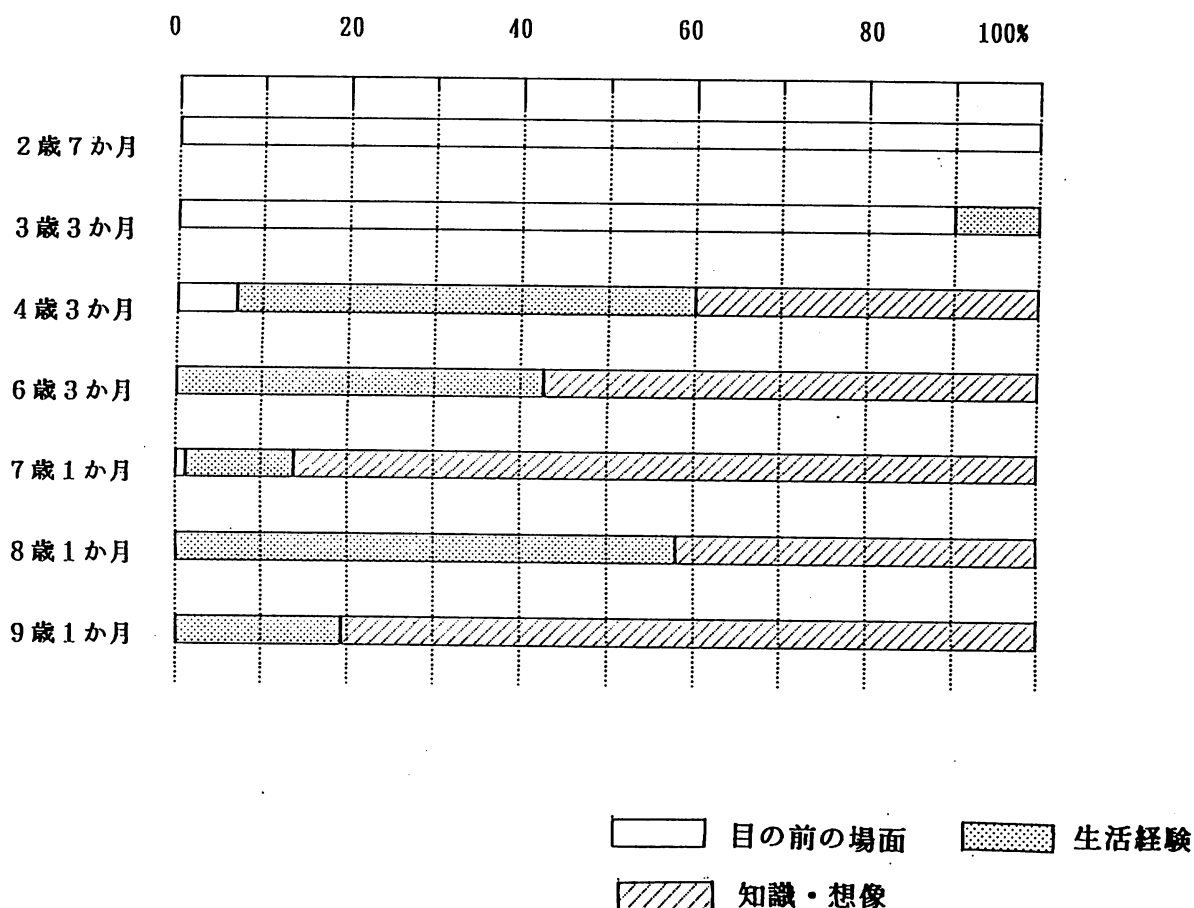


図 2 - 3 C 児 話題内容時間比

表 7 - 4 D 児 話題内容別時間数及び時間比

D 児	目の前の場面	生 活 経 験			知 識 ・ 想 像		合 計
		現 在	過 去	未 来	知 識	想 像	
2 歳10か月	2 7 5 秒 (1 0 0 %)						2 7 5 秒 (1 0 0 %)
3 歳11か月	4 8 0 秒 (1 0 0 %)						4 8 0 秒 (1 0 0 %)
4 歳11か月	4 2 0 秒 (1 0 0 %)						4 2 0 秒 (1 0 0 %)
6 歳11か月	7 4 0 秒 (9 0 . 8 %)	7 5 秒 (9 . 2 %)					8 1 5 秒 (1 0 0 %)
		75秒(9.2%)					
7 歳 9 か月	4 8 5 秒 (8 0 . 8 %)	1 1 5 秒 (1 9 . 2 %)					6 0 0 秒 (1 0 0 %)
		115秒(19.2%)					
8 歳 9 か月	2 4 0 秒 (2 8 . 9 %)	3 6 0 秒 (4 3 . 4 %)			2 3 0 秒 (2 7 . 7 %)		8 3 0 秒 (1 0 0 %)
		170秒(20.5%)	190秒(22.9%)			230秒(27.7%)	
9 歳 9 か月		8 6 5 秒 (1 0 0 %)					8 6 5 秒 (1 0 0 %)
		25秒(2.9%)	840秒(97.1%)				

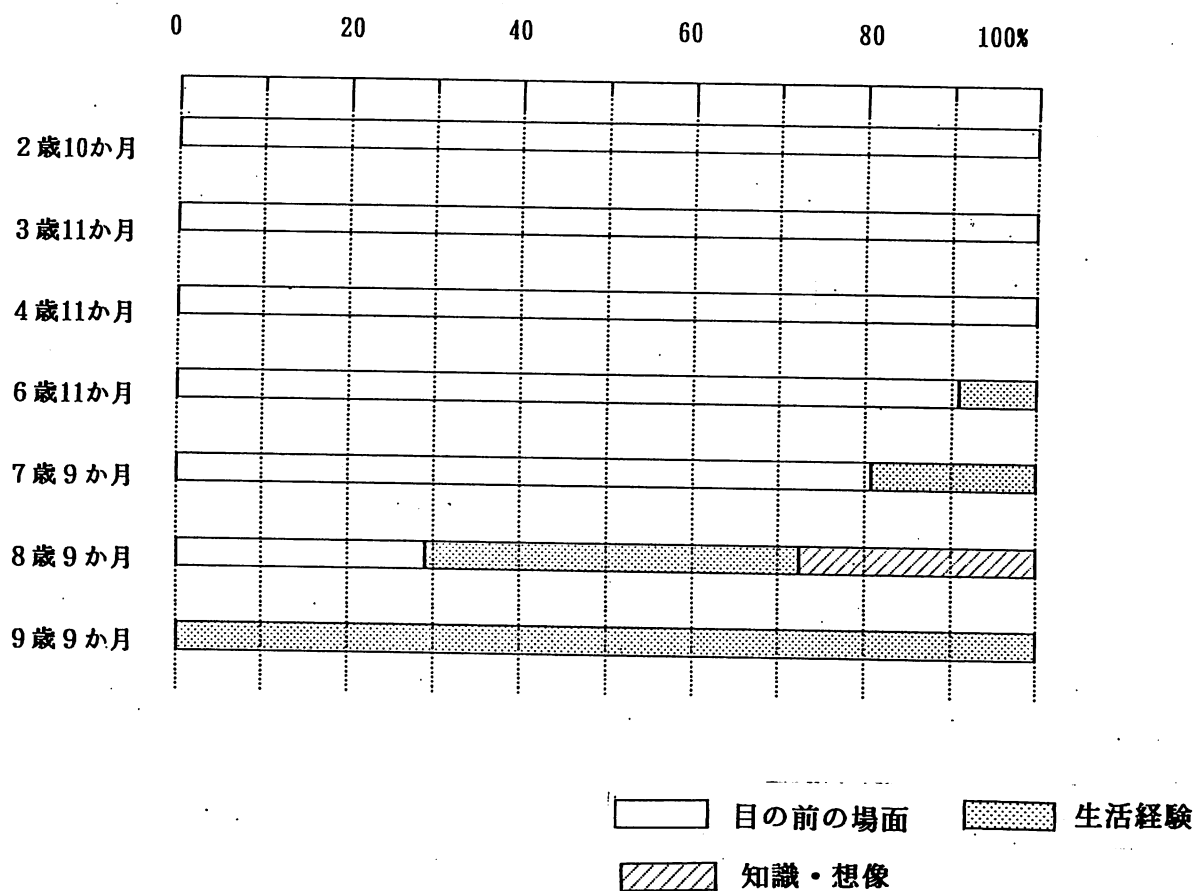


図 2 - 4 D 児 話題内容時間比

どの対象児も母との会話において、はじめのうち話題は目の前の場面のみであるが、次に生活経験（現在）の話題が現れ、生活経験（過去）、生活経験（未来）の話題が続き、最後に知識或いは想像の話題が現れる点では共通している。しかし、それぞれの話題が現れる年齢や割合（時間比）は事例によって異なる。

A～C児では、

- ・ 3歳時に生活経験（現在）の話題が現れ、4歳になると生活経験（現在）に加えて生活経験（過去）や子どもによっては生活経験（未来）の話題がなされている。6歳になるとA～C児共に生活経験（未来）の話題が見られる。

- ・ 知識或いは想像の話題については、学齢段階（6歳～7歳）で、両方の話題が見られる。知識、想像それぞれの話題の現れ方は子どもにより異なり、知識の話題が早く現れる事例（B児 6歳）、想像の話題が早く現れる事例（C児 4歳）、知識の話題と想像の話題が同時に現れる事例（A児 7歳）がある。

- ・ 話題全体に占める目の前の場面、生活経験、知識・想像の各大項目の割合（時間比）は、3歳時までは目の前の場面が多く、4歳時は生活経験が多くなっている。生活経験の話題が中心になった後、知識・想像の話題が中心になると予想されたが、必ずしも順番ではなく、子どもにより個人差があった。すなわち、A児では4歳、6歳と生活経験の話題が多く7歳以降知識・想像の話題が多くなるように順番に話題の中心が変わっていったが、C児では4歳時からすでに知識・想像の話題が大きな割合で現れており、生活経験と知識・想像の話題が混在する形になっている。B児では4歳時は生活経験の話題が多く、知識・想像の話題は未だ見られないが、6歳から知識・想像が混在もしくは中心になっている。

D児では、

- ・ 6歳時に生活経験（現在）の話題が、8歳時に生活経験（過去）の話題が初めて現れ、生活経験（未来）の話題については最後まで見られない。
- ・ 8歳時に想像の話題が初めて現れ、知識の話題については最後まで見られない。
- ・ 話題全体に占める目の前の場面、生活経験、知識・想像の各大項目の割合（時間比）は、7歳時まで目の前の場面の話題が多く、8歳時、9歳時には生活経験の話題が多くなっている。

3. 発話の変化

（1）発話数の変化

各対象児の発話数を、了解不能発話数、一部了解不能発話数、了解可能発話数に分けて求め、全発話数も求めた。A～D児の結果を表8－1から表8－4及び図3－1から図3－4に示す。

表 8 - 1 A 児 発話数

A 児	了解不能発話数	一部了解不能発話数	了解可能発話数	全発話数
1 歳 7 か月	1 1 4	0	3	1 1 7
2 歳 3 か月	5 4	0	1 7	7 1
3 歳 2 か月	8 9	2	5 0	1 4 1
4 歳 3 か月	3 3	1 0	1 0 2	1 4 5
6 歳 4 か月	2	0	1 2 5	1 2 7
7 歳 3 か月	0	5	1 0 8	1 1 3
8 歳 3 か月	0	1	1 0 4	1 0 5
9 歳 3 か月	0	4	1 2 6	1 3 0

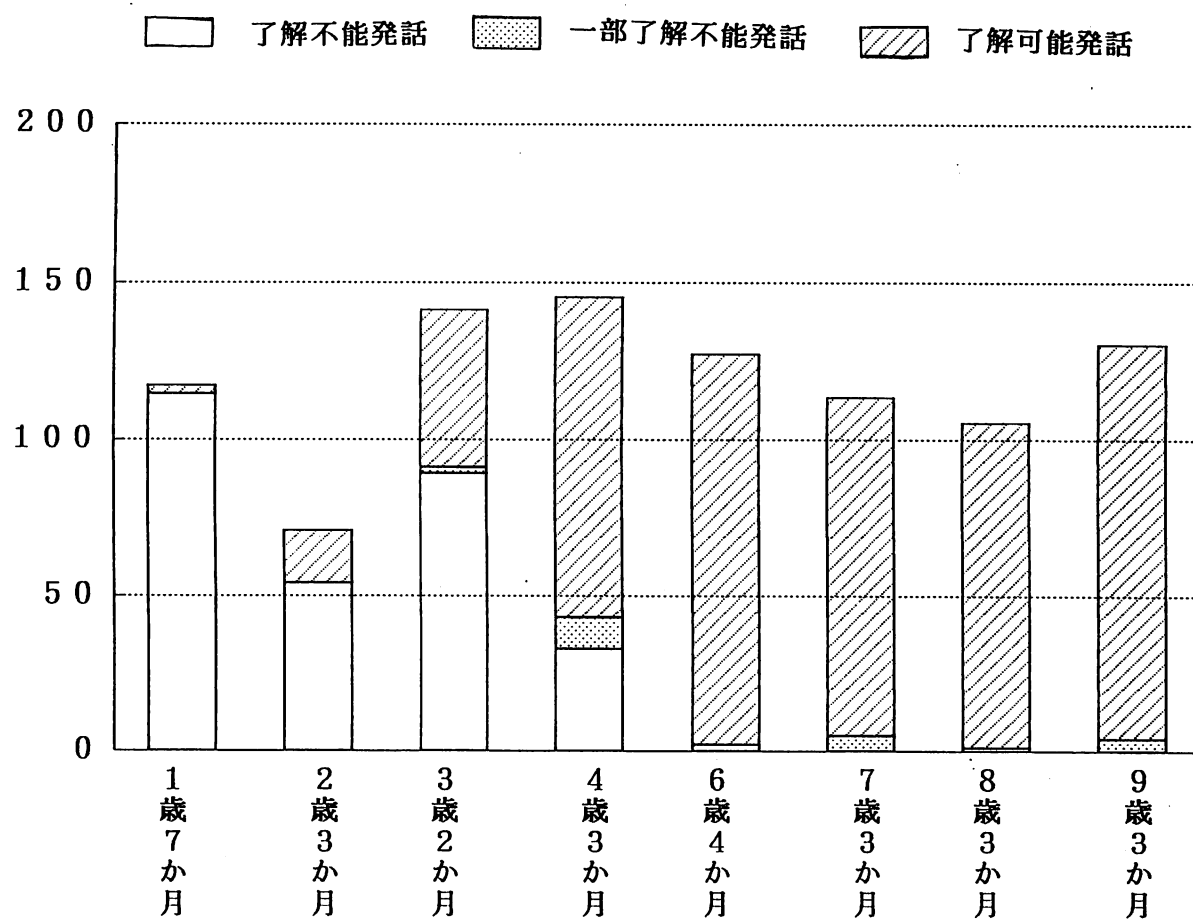


図 3 - 1 A 児 発話数

表 8 - 2 B 児 発話数

B 児	了解不能発話数	一部了解不能発話数	了解可能発話数	全発話数
1 歳 9 か月	3 9	0	1	4 0
2 歳 3 か月	7 4	0	8	8 2
3 歳 2 か月	5 3	0	5 4	1 0 7
4 歳 3 か月	3 8	8	5 1	9 7
6 歳 3 か月	2	3	8 8	9 3
7 歳 1 か月	5	3	9 8	1 0 6
8 歳 1 か月	6	3	1 0 5	1 1 4
9 歳 1 か月	4	2	9 4	1 0 0

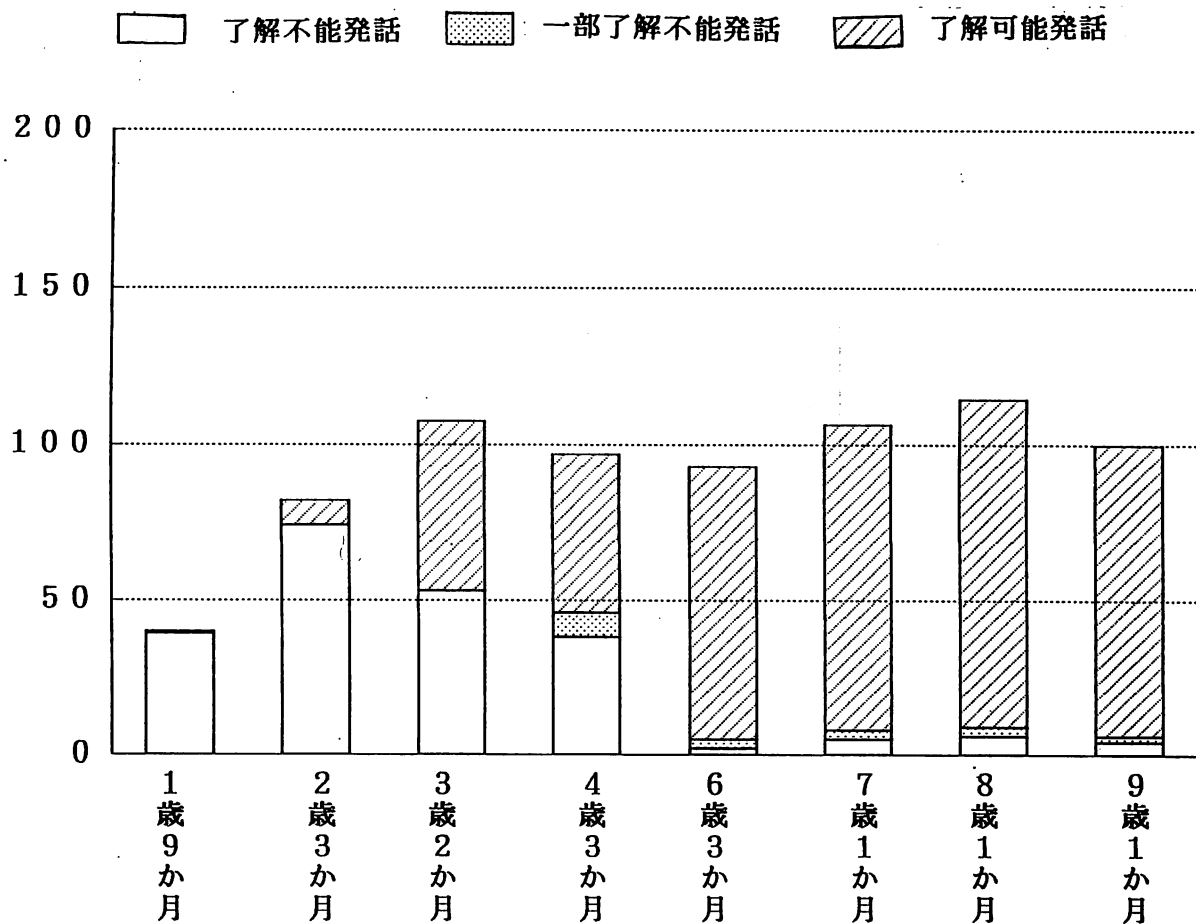


図 3 - 2 B 児 発話数

表 8 - 3 C 児 発話数

C 児	了解不能発話数	一部了解不能発話数	了解可能発話数	全発話数
2 歳 7 か月	3 9	0	7	4 6
3 歳 3 か月	9 8	2	2 5	1 2 5
4 歳 3 か月	4 7	2	6 3	1 1 2
6 歳 3 か月	5	5	1 2 0	1 3 0
7 歳 1 か月	4	6	1 3 7	1 4 7
8 歳 1 か月	0	0	1 7 6	1 7 6
9 歳 1 か月	1	3	1 2 7	1 3 1

了解不能発話
 一部了解不能発話
 了解可能発話

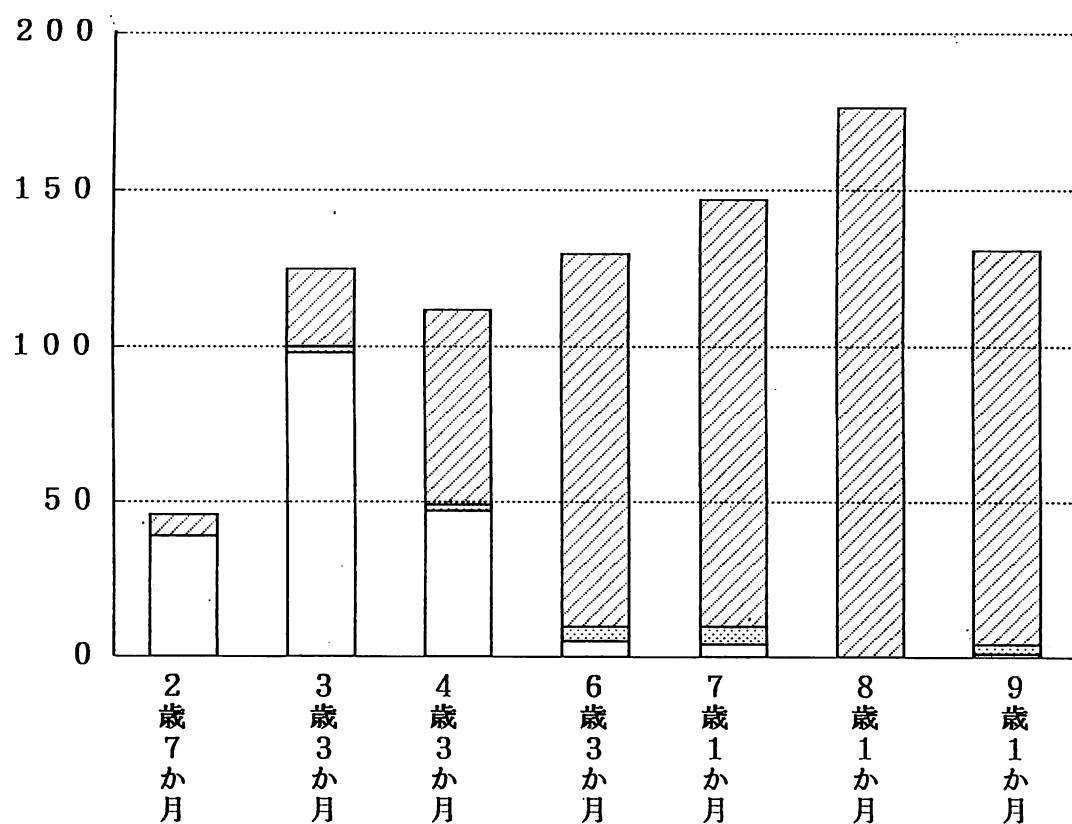


図 3 - 3 C 児 発話数

表 8 - 4 D 児 発話数

D 児	了解不能発話数	一部了解不能発話数	了解可能発話数	全発話数
2 歳 10 か月	8 8	0	1	8 9
3 歳 11 か月	1 2 7	0	7	1 3 4
4 歳 11 か月	9 5	0	6	1 0 1
6 歳 11 か月	7 0	5	9 3	1 6 8
7 歳 9 か月	4 5	5	7 2	1 4 2
8 歳 9 か月	3	5	9 1	9 9
9 歳 9 か月	1 5	9	9 3	1 1 7

了解不能発話
 一部了解不能発話
 了解可能発話

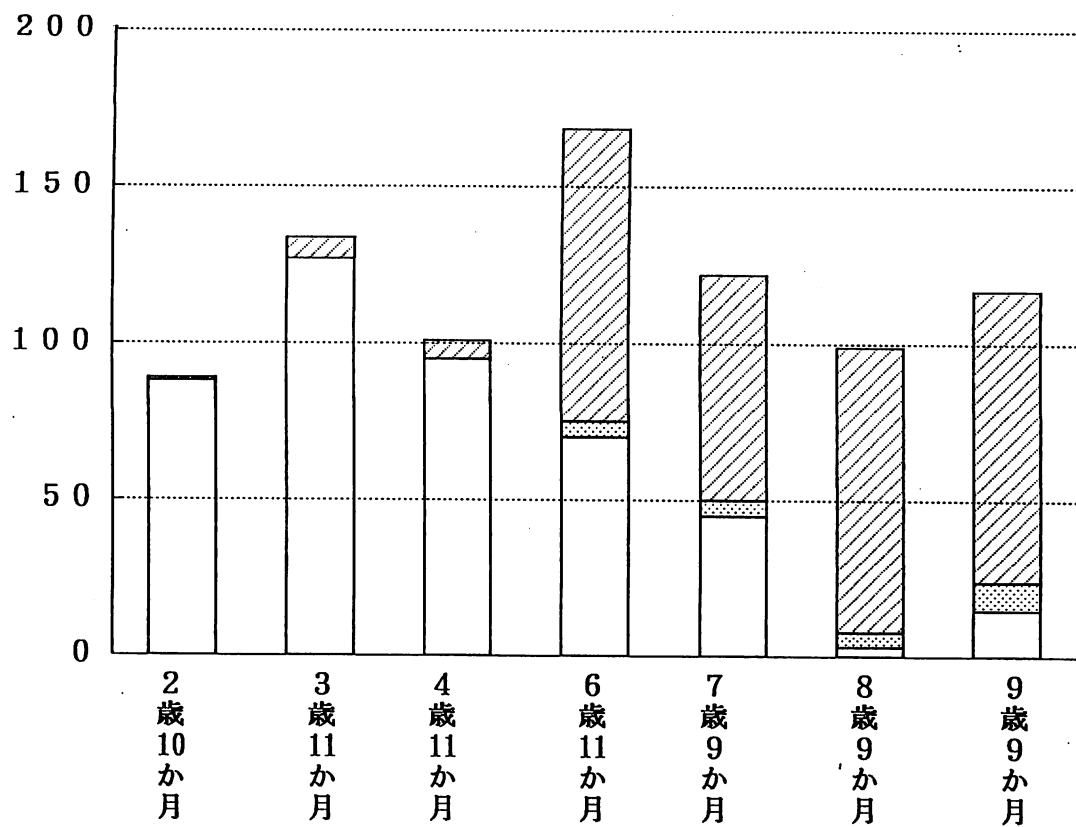


図 3 - 4 D 児 発話数

全発話数の変化については年齢による、また事例による特徴は特に見られない。

A～C児では3歳台までは了解不能発話が多いが徐々に了解可能発話が増え、4歳時には半数を越える。また6歳以降は了解可能発話がほとんどになる。一部了解不能発話はA児、B児では4歳時に多く、C児では6、7歳時に多くなっており、共に8歳時、9歳時は少なくなっている。

これに対し、D児では、4歳時まで了解可能発話はほとんど増えず、了解可能発話が半数を越えるのは6歳時である。また了解可能発話がほとんどになるのは8歳以降であり、それぞれ2年の遅れが見られる。一部了解不能発話についても9歳時に多くなっており、遅れが見られる。

(2) 異なり語彙数の変化

各児の了解可能発話中の異なり語彙数を、掛け声・挨拶・定型、オノマトペ、自立語（名詞、動詞、接統詞、その他）、付属語（助詞、助動詞）に分類して計数した。A～D児の結果を表9-1から表9-4に示す。また、2歳から9歳までのA～D児の異なり語彙数の変化を図4に、助詞数の変化を図5に示す。

表9-1 A児 異なり語彙数

A児	掛け声 挨拶 定型	オノマトペ	自 立 語				付 属 語		合 計
			名 詞	動 詞	接統詞	その他	助 詞	助動詞	
1歳7か月	1	2							3
2歳3か月		2	2	2					6
3歳2か月	1	2	11	6		8	3		31
4歳3か月	4	1	38	11		4	9	5	72
6歳4か月	8		27	24		15	16	8	98
7歳3か月	9	8	59	29	2	37	21	8	173
8歳3か月	10	10	52	21	1	31	19	7	151
9歳3か月	13	9	62	25	4	34	18	7	172

表9-2 B児 異なり語彙数

B児	掛け声 挨拶 定型	オノマトペ	自 立 語				付 属 語		合 計
			名 詞	動 詞	接統詞	その他	助 詞	助動詞	
1歳9か月		1							1
2歳3か月		7	1						8
3歳2か月	3	7	3	6		9	2		30
4歳3か月	9	1	26	6		3	4	3	52
6歳3か月	12		37	13		13	9	7	91
7歳1か月	8		27	18	2	18	7	4	84
8歳1か月	12	5	43	20	2	16	18	6	122
9歳1か月	12	3	42	15	1	21	15	6	115

表9-3 C児 異なり語彙数

C児	掛け声 挨拶 定型	オノマトペ	自 立 語				付 属 語		合 計
			名 詞	動 詞	接続詞	その他	助 詞	助動詞	
2歳7か月	2	1	1						4
3歳3か月	2	2	8	1		1	1	2	17
4歳3か月	6	6	21	5		7	5	3	53
6歳3か月	7	10	59	19	4	11	14	5	129
7歳1か月	9	5	82	19	2	27	17	5	166
8歳1か月	15	14	88	35	4	44	19	5	224
9歳1か月	6	11	71	42	6	38	18	5	197

表9-4 D児 異なり語彙数

D児	掛け声 挨拶 定型	オノマトペ	自 立 語				付 属 語		合 計
			名 詞	動 詞	接続詞	その他	助 詞	助動詞	
2歳10か月		1							1
3歳11か月	1		1						2
4歳11か月		1	2						3
6歳11か月	2	3	13	4		3	2	3	30
7歳9か月	2	1	19	4		7	1	2	36
8歳9か月	6	1	56	6		12	5	2	88
9歳9か月	3	3	36	6		12	8	4	72

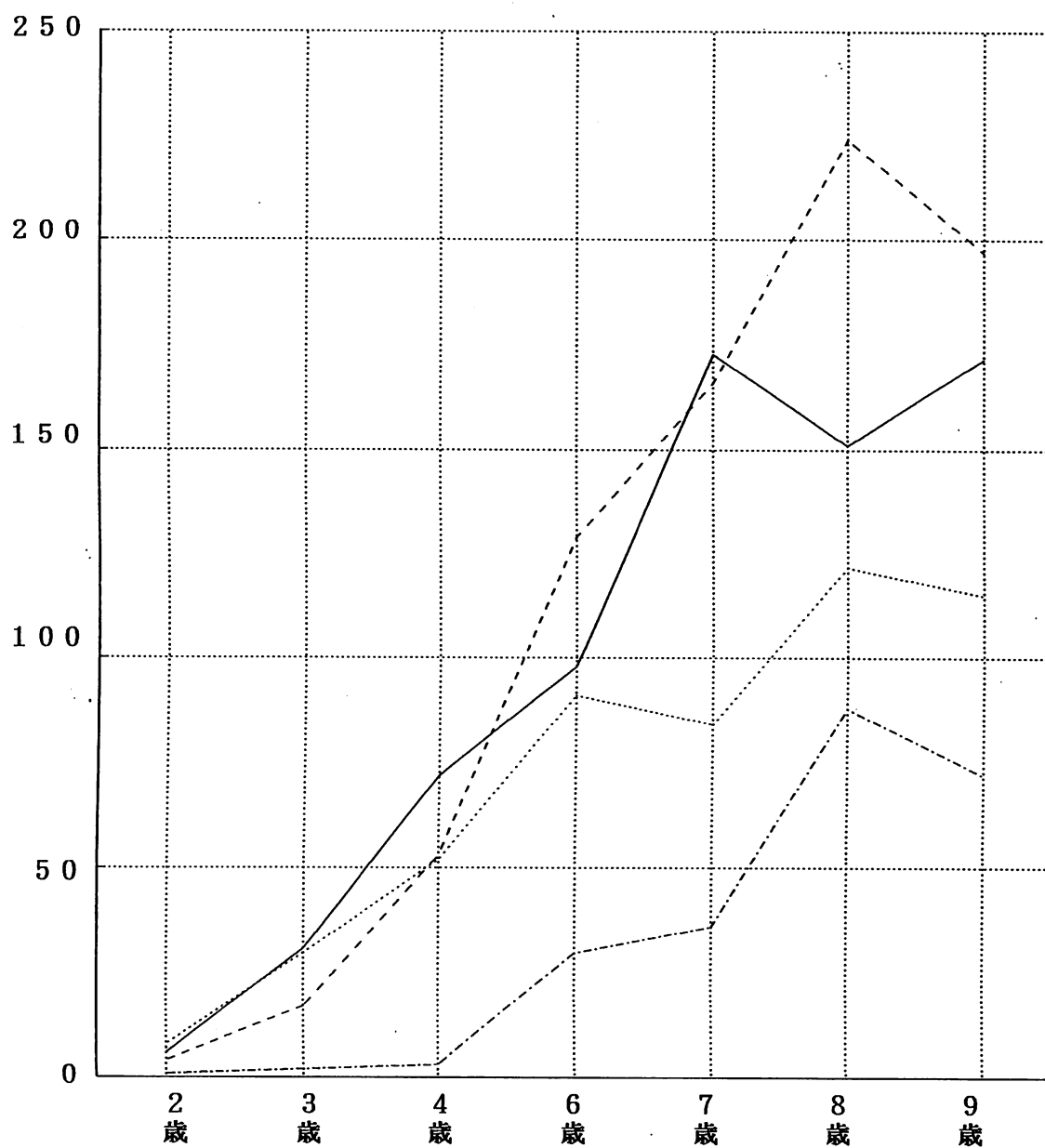


図4 A～D児 異なり語彙数の変化

A児 ———
 B児 - - - -
 C児
 D児 - · - ·

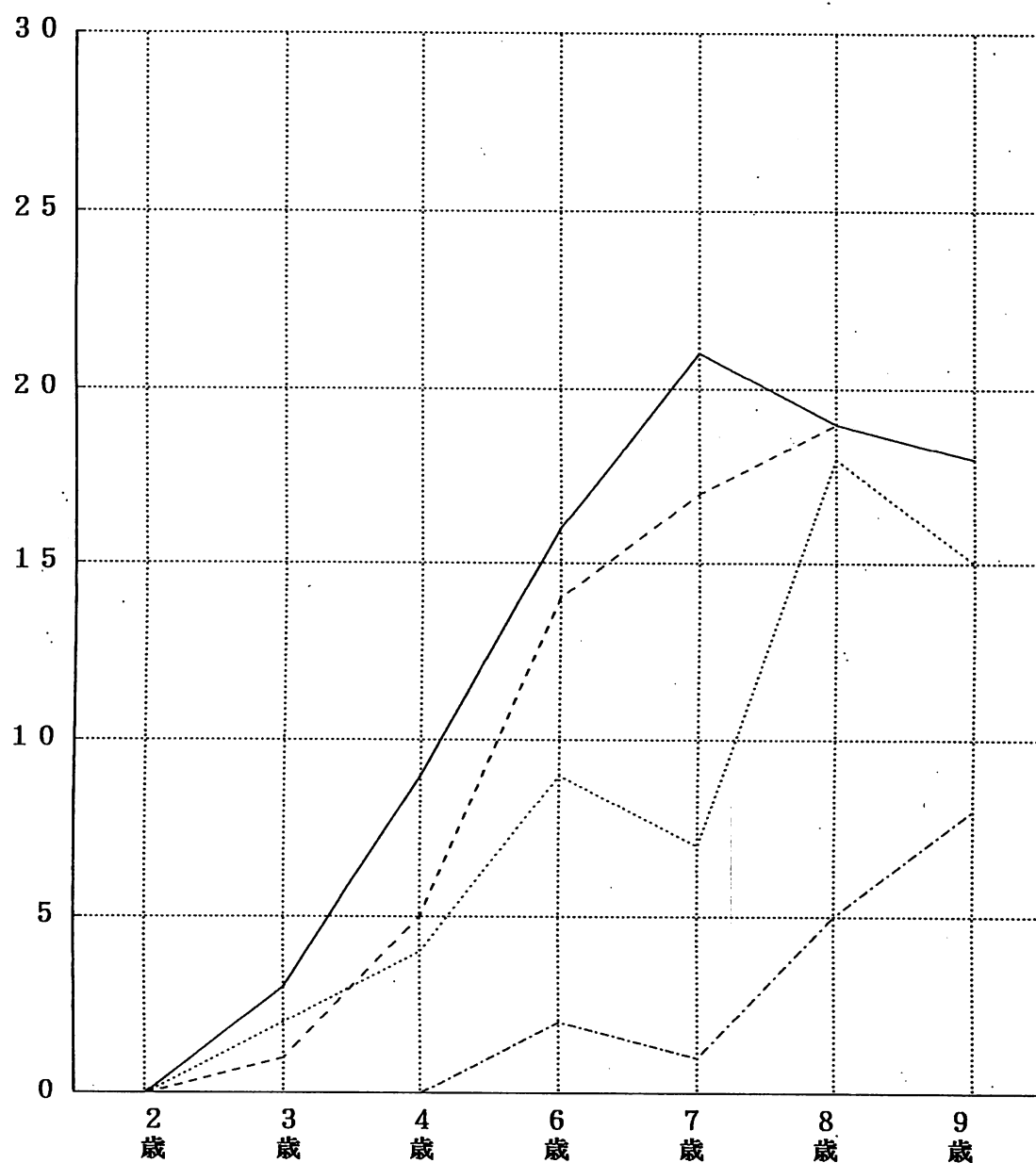


図5 A～D児 助詞数の変化

A児 —
 B児 - - -
 C児
 D児 - · - ·

対象児の異なり語彙数はどの場合も次第に増加傾向にあるが、その伸び方や伸びはじめの時期には、A～C児とD児ではかなりの違いがあった。

A児、C児では話題により増減はあるが、ほぼ順調に語彙数が増えているといえる。B児は6歳まではA児、C児とほぼ同様に順調に語彙数が増えているが、7歳以降はA児、C児に比べて語彙数が増えていない。品詞別に見ると、A～C児で付属語は3歳時に現れている。特に助詞はA児、C児では6歳時には数が2桁になっている。B児では助詞数が増えるのは遅れる。しかし、8歳時には2桁になっており、8歳時、9歳時の助詞数はA児、C児とほぼ同等になっている。接続詞はA児、B児で7歳から、C児で8歳から見られる。これらの事から正しい日本語の構文の整いつつある事が推察される。

D児では4歳時まで了解可能な語彙が非常に少く、6歳時、8歳時に段階的に語彙が増加しているが、9歳時の異なり語彙数もA～C児と比較して少ない。付属語は6歳時に初めて現れる。助詞の数は4歳時まで0であり、6歳、8歳、9歳で増えてはいるが、9歳まで1桁台にとどまっている。接続詞は9歳まで見られない。また、名詞が多く、動詞が極端に少ないといったバランスの悪さが見られる。この事から、正しい日本語の構文はまだ整っていないと考えられる。

(3) 発話長の変化

各児の発話を、文節単位発話長により分類し、平均発話長を求めた。表及び図中の1～5語文は、助詞を含む文(1～5文節文)、含まない文の両方をまとめて指す。尚、5文節以上の発話は、5語文以上としてまとめて計数した。

A～D児の分類結果を表10-1から表10-4に示す。また、A～D児の1語文、語連鎖、2語文、3語文、4語文、5語文以上の文それぞれの割合を図6-1から図6-4に示す。

表10-1 A児 発話長

A児	相槌 聞き返し	1語文		語連鎖	2語文	3語文	4語文	5語文以上	平均発話長
		単語のみ	単語+付属語						
1歳7か月	1	2	0	0	0	0	0	0	1.00
2歳3か月	0	17	0	0	0	0	0	0	1.00
3歳2か月	1	37	0	2	9	1	0	0	1.22
4歳3か月	3	33	7	6	36	11	7	5	2.00
6歳4か月	45	22	6	1	32	18	2	0	1.93
7歳3か月	16	11	13	3	27	18	6	15	3.23
8歳3か月	16	12	13	5	18	14	11	20	3.03
9歳3か月	17	23	9	3	26	14	10	27	3.07

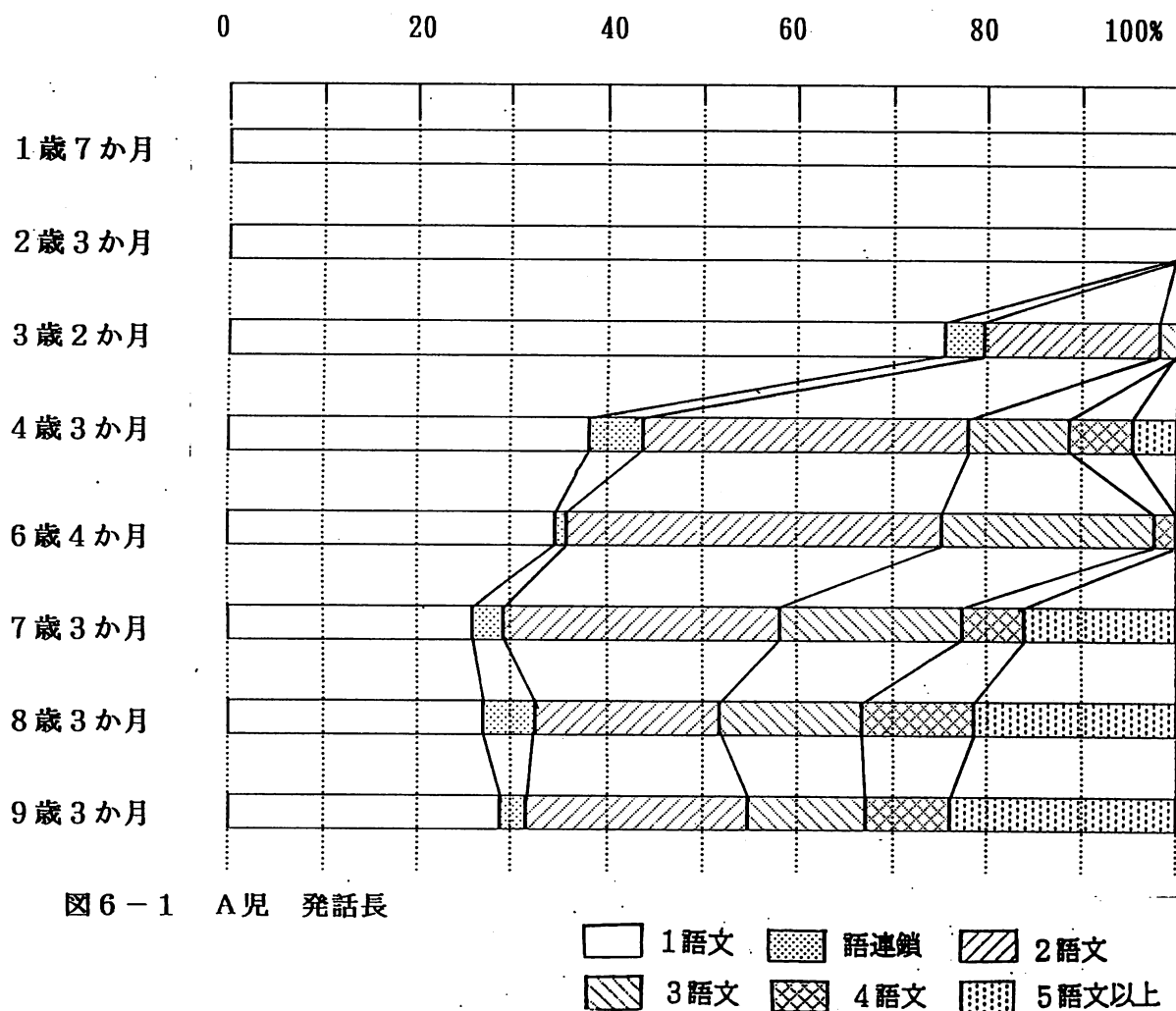


図6-1 A児 発話長

表10-2 B児 発話長

B児	相槌 聞き返し	1語文		語連鎖	2語文	3語文	4語文	5語文以上	平均発話長
		単語のみ	単語+付属語						
1歳9か月	0	1	0	0	0	0	0	0	1.00
2歳3か月	0	8	0	0	0	0	0	0	1.00
3歳2か月	2	38	11	0	3	0	0	0	1.06
4歳3か月	8	26	3	2	8	4	2	0	1.51
6歳3か月	14	17	13	2	16	9	4	5	2.03
7歳1か月	15	36	16	6	18	5	7	1	1.88
8歳1か月	13	24	24	5	23	4	8	9	2.11
9歳1か月	20	33	17	0	12	8	1	3	1.60

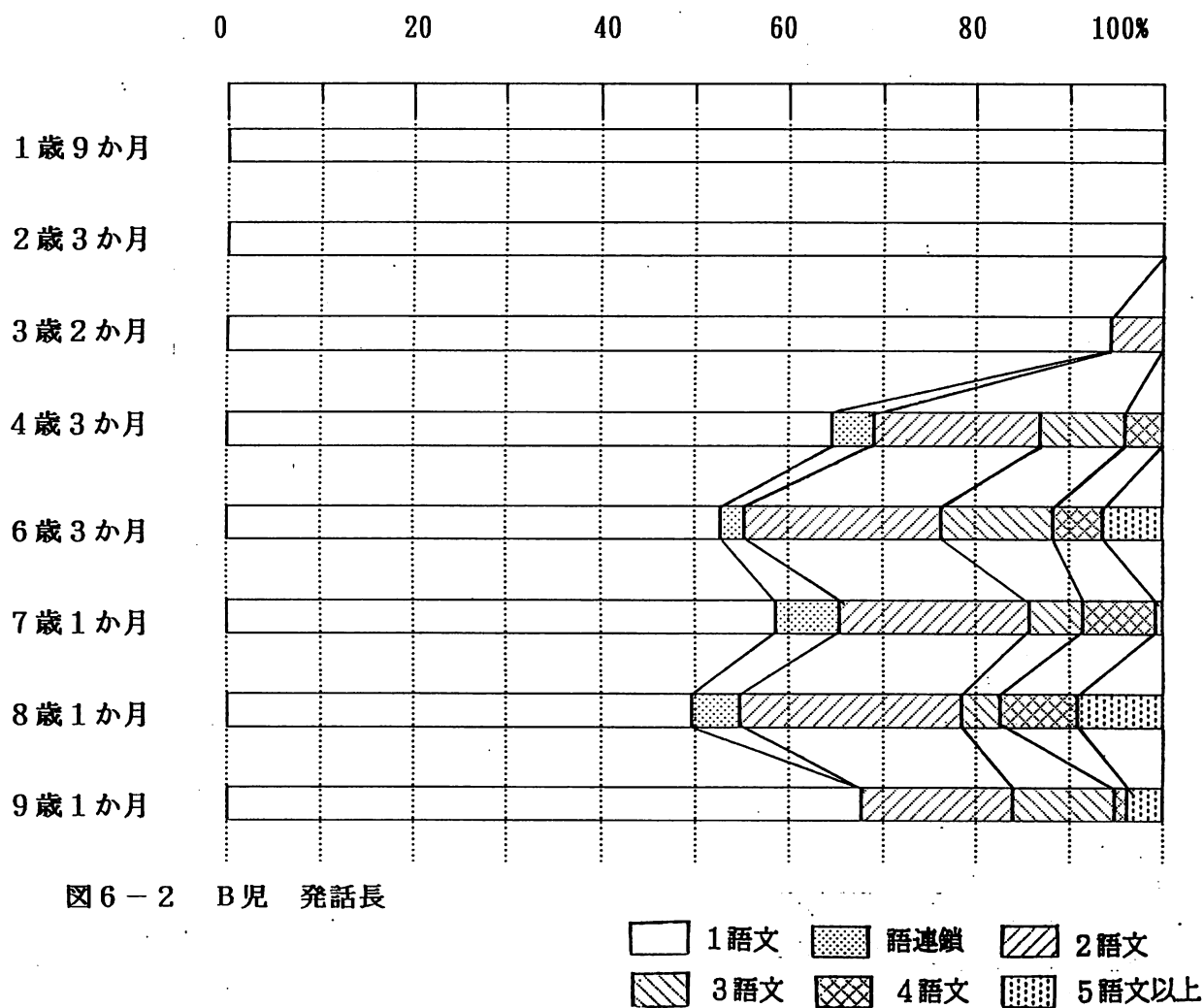


図6-2 B児 発話長

表10-3 C児 発話長

C児	相槌 聞き返し	1語文		語連鎖	2語文	3語文	4語文	5語文以上	平均発話長
		単語のみ	単語+付属語						
2歳7か月	0	7	0	0	0	0	0	0	1.00
3歳3か月	0	13	5	5	7	0	0	0	1.28
4歳3か月	5	24	11	8	15	7	1	0	1.55
6歳3か月	10	19	20	0	21	20	5	25	2.69
7歳1か月	16	27	17	0	19	25	10	23	2.93
8歳1か月	40	38	22	0	25	12	5	34	3.01
9歳1か月	19	14	17	0	17	25	13	22	3.69

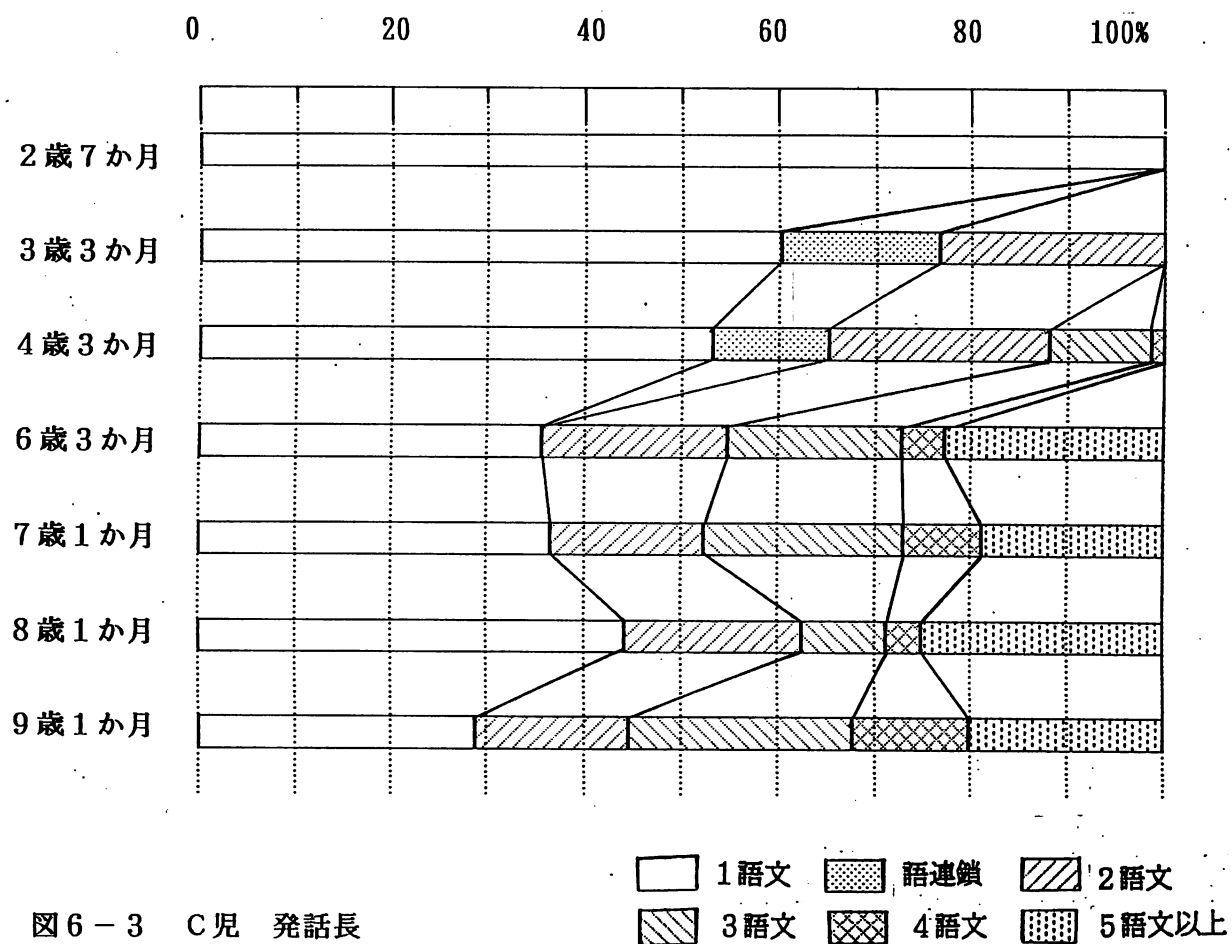


図6-3 C児 発話長

表10-4 D児 発話長

D児	相槌 聞き返し	1語文		語連鎖	2語文	3語文	4語文	5語文以上	平均発話長
		単語のみ	単語+付属語						
2歳10か月	0	1	0	0	0	0	0	0	1.00
3歳11か月	1	6	0	0	0	0	0	0	1.00
4歳11か月	1	5	0	0	0	0	0	0	1.00
6歳11か月	5	59	15	6	6	2	0	0	1.18
7歳9か月	10	25	22	5	6	1	3	0	1.17
8歳9か月	12	32	8	6	17	11	5	0	2.04
9歳9か月	11	37	8	3	16	9	4	5	1.84

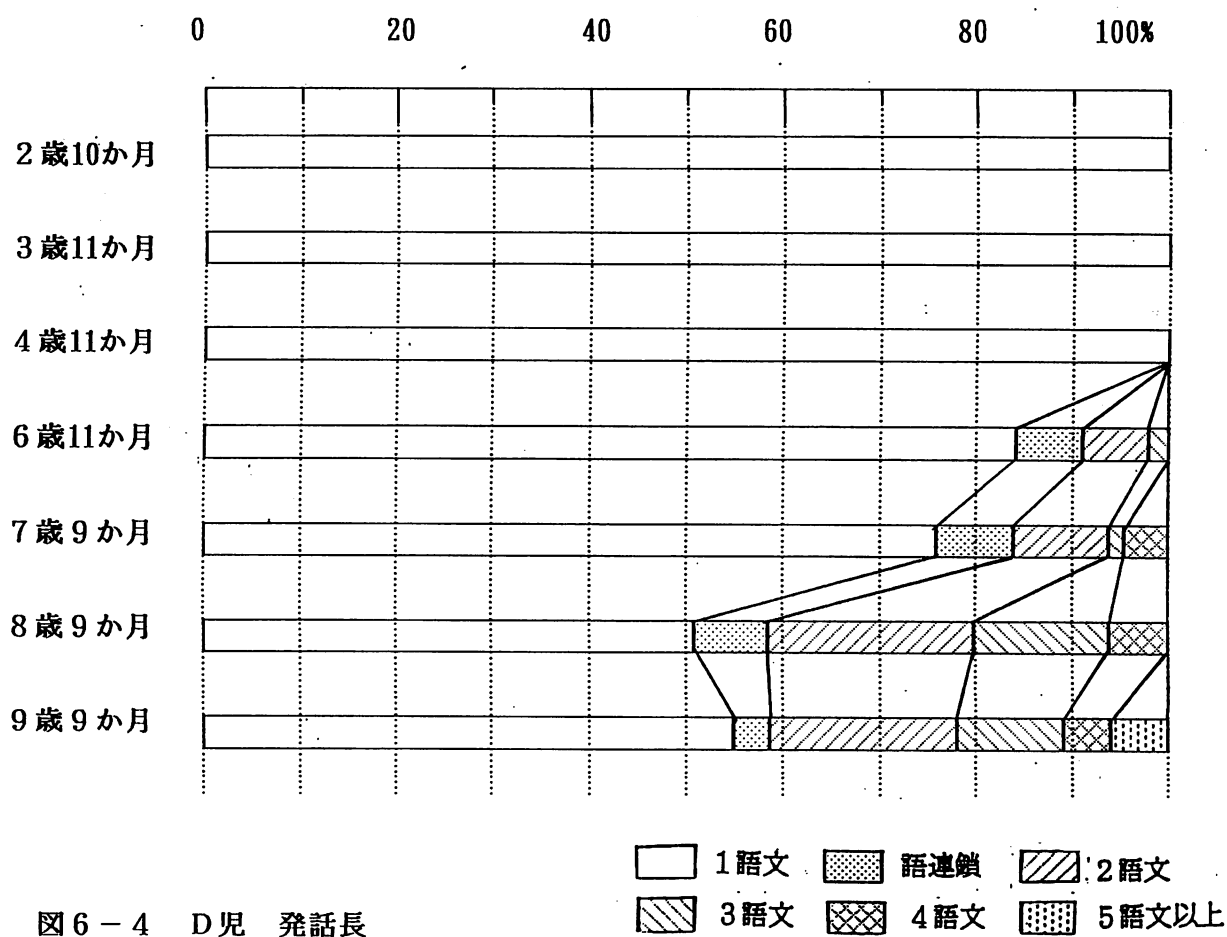


図6-4 D児 発話長

表10-1～4及び図6-1～4に示すように、連語文の現れる時期はA～C児とD児で異なっていた。

A～C児では、

- ・ 単語のみは資料のはじめから見られ、単語＋付属語、語連鎖はいずれも3～4歳で現れている。すなわち、単語＋付属語はA児では4歳、B児、C児では3歳で現れ、語連鎖はA児、C児では3歳、B児では4歳に現れている。
- ・ 2語文は3歳時に現れている。
- ・ 相槌、聞き返しが6歳以降増加している。これは母親の話の内容を良く理解し、相槌を打ったり、また分からない時は聞き返すという自然な会話の仕方が身についてきたためと思われる。

D児では、

- ・ 単語＋付属語、語連鎖ともに6歳時に初めて見られる。
- ・ 2語文は6歳時に初めて現れている。
- ・ 相槌・聞き返しが増加するのは7歳時になってからであり、その数は以後も少ない傾向にある。

平均発話長の変化については、事例で共通した特徴は見られなかった。A、C児は平均発話長が比較的順調に伸びたが、B、D児はあまり伸びなかった。B児は6歳以降、D児は8歳以降ではほぼ平均2語文であるが、9歳でもそれ以上になっていない。

IV. 考察

1. 全般的考察

(1) 会話成立水準の変化について

A～C児では、会話成立水準の変化において、2歳から3歳の間、3歳から4歳の間、4歳から6歳の間の3回に大きな区切りがあった。従って、A～C児の会話成立水準の観点からは、言語発達の特徴に於て4つのレベルが見られる事が分かった。

第1レベル（A～C児では0歳～2歳台）は、一方通行の会話未成立型と、やり取りが1～2往復成立するが長続きしない会話成立しかけ型とから成る。特に母親から開始の場合の会話未成立型が多い。聴覚障害児の場合、補聴器を装用して初めて環境音や人の話し声に気付くので、まだ話しかけに気付く事が少いと考えられ、会話未成立型が多いのはこの時期では当然の事と思われる。A～C児の補聴器装用開始年齢を見ると、それぞれ1歳4か月、11か月、1歳5か月であり、この時期は補聴開始後1年ぐらいの時期なので、まだ母親の声を聞き溜めながら、自分の声出しを楽しみ、時々それが母親に応じてもらったり、自分でも表情や身振りと合わせてなんとか母親の話しかけに答えようとし始める時期だといえよう。

第2レベル（3歳台）は、3人ともまだ会話未成立型も残っているが、ある程度やり取りが続く会話成立型が出てくる。母親との基本的信頼関係の中で、簡単なコミュニケーションができ始めていると思われる。

第3レベル（4歳～6歳未満）では、3人ともやり取りが持続する会話持続型が多くなる。思考力がつき、様々な事項に思いを巡らせながら、一つの話題でかなり長いやり取りができるようになる。しかしまだまだ

言語力の面では不十分であるため、この段階ではまだ母親が拡充模倣して子どもに正しい日本語を教えたり、それを子どもが口声模倣するといった言語活動が含まれている。

第4レベル（6歳～9歳台）になると、健聴児と母親のやり取りのよ
うに、母親の側の拡充模倣や子どもへの口声模倣の促しなしに自然な会
話が続く会話成熟型が中心になる。これは、子どもに文脈から母親の話
の内容を類推する力が付き、また自分の言葉が母親に通じなかったよう
な場合には他の表現で言い直して説明できるようになったためと思われ
る。5歳時の資料がないため、便宜上第4レベルを6歳からとしたが、
6歳以前にこのレベルに到達している可能性もある。

しかし、すべての聴覚障害児が必ずしも同時期にこの4レベルを辿る
わけではないことがD児の例から分かる。D児では会話成立水準が分散
しはっきりとは指摘しづらいが、4歳から6歳の間と、7歳から8歳の
間の2回大きな区切りが見られる。内容的には6歳未満が会話未成立型
と会話成立しかけ型の第1レベル、6歳～7歳台が会話成立型の出てく
る第2レベル、8歳～9歳台が会話持続型の第3レベルである。会話成
熟型の第4レベルにはまだ至っていない。

（2）話題内容の変化について

A～C児では話題内容の変化についても、会話成立水準の変化同様に
ほぼ同時期に3つの発達の区切りが認められた。従って、話題内容の観
点から見た言語発達に於ても、やはり4レベルがある事が考えられた。

第1レベル（A～C児では0歳～2歳台）は、目の前の場面の話題の
みがなされ、それ以上の話題の広がりは見られない。

場面の話題が中心ではあるが、身近な物や人については目の前になくても、母子間で共通に理解して話題にできるようになってきたものと思われる。

第3レベル（4歳～6歳未満）は、いま目の前にない人や物についての生活経験（現在）の話題に加え、自分のした事、見た事といった生活経験（過去）の話題や、近未来の自分の予定についての生活経験（未来）の話題が中心になり、目の前の場面の話題は少くなっている。

第4レベル（6歳～9歳台）は、A～C児では想像的話題や知的話題が多くなっていた。しかし、その時の状況により生活経験の話題が多くなる場合もあり、話題内容の観点からは、生活経験中心の第3レベルから想像的話題や知的話題中心の第4レベルへの移行はあまり明白ではなく、またその変化の時期には個人差があるように思われる。C児では既に4歳でも生活経験の話題に加え、知識・想像の話題が出てきている。一方、このような話題はB児では6歳（就学前）から、A児では7歳（小学1年生）から出てきた。

また、D児の例からすべての聴覚障害児が同時期にこのような発達経過を辿るのではない事が分かる。D児では会話成立水準の変化と同様に、4歳から6歳の間と7歳から8歳の間に大きな区切りが見られる。内容的には6歳未満は目の前の場面中心の第1レベルに、6歳～7歳台は少し生活経験の話題が出てくる第2レベルに、8歳～9歳台が生活経験の話題が多くなる第3レベルに当たっていた。

(3) 発話の変化について

発話の変化については会話成立水準の変化や話題内容の変化同様、A児、C児で3つの区切りが、D児ではほぼ2つの区切りが見られた。B児はA児、C児と似た言語発達を示してはいるが、変化が小さかったり、遅れたりする傾向があった。

① 発話数の変化

発話の了解度の観点から見ると、A児、C児では2歳から3歳の間、3歳から4歳の間、4歳から6歳の間の3回大きな区切りが見られた。会話成立水準の変化や話題内容の変化同様、ここでも4レベルを認める事ができる。

第1レベル（A児、C児では0歳～2歳台）は、了解可能発話は非常に少なく、20未満である。

第2レベル（3歳台）になると、了解可能発話は全発話数の2～3割になる。

第3レベル（4歳～6歳未満）になると、了解可能発話が全発話中半分以上になる。

第4レベル（6歳～9歳台）は、了解可能発話がほとんどになっている。

B児では3歳から4歳の間の変化（伸び）がなかったため、A児、C児に比べ、第2レベルから第3レベルへの変化が顕著ではない。これは、3歳台ですでに了解可能発話が全発話の半分近くになっているためと思われる。しかし、全体として発話数が少なく、そのため6歳以降の第4レベルの了解可能発話数もA児、C児と比べると、少いままである。

D児では4歳から6歳の間、7歳から8歳の間の2回大きな区切りが見られた。この区切りの時期は会話成立水準や話題内容の区切りの時期

と一致している。内容的には、6歳未満が了解可能発話が20未満の第1レベル、6歳～7歳台が了解可能発話が半数を越える第3レベル、8歳～9歳台が了解可能発話がほとんどとなる第4レベルと考えられる。B児同様第2レベルの時期がはっきりしないが、第1レベルから第3レベルの移行の時期に、4歳から6歳までと2年間の幅があるので、この間に第2レベルを通過してきたものと思われる。また、B児同様第4レベルにおいても、了解可能発話数はA児、C児に比べると少ない事が特徴としてあげられる。

②異なり語彙数の変化

本研究における異なり語彙数は、子どもがその年齢で持つ使用語彙数ではなく、15分間の資料に限っての計数である。そのため、異なり語彙数だけでなく、日本語の文法的正しさの指標として、助詞数と合わせて発達的变化を見たところ、A児、C児で会話成立水準の変化や話題内容の変化同様2歳から3歳の間、3歳から4歳の間、4歳から6歳の間の3回の区切りが見られ、4レベルがあると考えられた。

第1レベル（0歳～2歳台）では異なり語彙数は1桁である。助詞は見られない。

第2レベル（3歳台）で異なり語彙数は2桁になり、助詞は1～3個見られる。

第3レベル（4歳～6歳未満）では異なり語彙数が50を越え、助詞数が4～9個になる。

第4レベル（6歳～9歳台）になると異なり語彙数はほぼ100以上になり、助詞数が2桁台になる。

B児では第1レベルが0歳～2歳台、第2レベルが3歳台と、A児、

C児と同様の発達を見せたが、その後の伸びが小さく、第3レベルから第4レベルへの移行が遅れた。第3レベルが4歳～7歳台、第4レベルが8歳～9歳台となっている。

D児では会話成立水準の変化や話題内容の変化同様4歳から6歳の間、7歳から8歳の間の2回区切りが認められた。従って、第1レベルが6歳未満、第2レベルが6歳～7歳台、第3レベルが8歳～9歳台に当たり、第4レベルにはまだ至っていない。

③発話長の変化

平均発話長は全事例を通じて4以下であり、共通した変化の段階は見られなかった。そこで、文の長さがどの段階で変化したかという観点から見ると、A～C児の言語発達には共通した4レベルがあるということができる。その変化の時期は、会話成立水準の変化、話題内容の変化と一致していた。

第1レベル（A～C児では0歳～2歳台）は1語文しか見られない。

第2レベル（3歳台）は2語文が出現する。

第3レベル（4歳～6歳未満）は3語文、4語文が出現する。

第4レベル（6歳～9歳台）は5語文以上の文が見られる。A児では6歳時には5語文以上の文は見られないが、4歳で既に5語文以上の文が見られる。

D児では6歳未満の第1レベル、6歳台の第2レベル、7歳～8歳台の第3レベル、9歳台の第4レベルに分けられる。

(4) まとめ－発達の対応関係について

(1)～(3)より、会話成立水準の変化や話題内容の変化といった言語活動面の発達と、発話数の変化、異なり語彙数の変化、発話長の変化といった言語力面の発達は無関係に起こるのではなく、ほぼ同時期に車輪の両輪となって変化していることが分かる。

A～C児ではほぼ順調な言語発達が見られ、会話成立水準に大きな変化が見られる時期に話題内容にも変化が現れ、言語力の伸びもみられている。その言語発達は大きく4レベルにまとめる事ができる。以下に各レベルの内容を要約する。但し、この中でB児については言語力面の変化が言語活動面の変化に比べて順調ではなく、段階的变化が顕著でなかったり、変化の時期がやや遅れる傾向にあった。

[第1レベル] A～C児については0歳～2歳台に当たる。

- ・母親の語りかけにまだ答えられないか、答えてもやり取りとして長続きしない。母親も子どもの発声の意味を汲んで適当に応ずる事があまりできず、また応じてもやり取りとして続かない。
- ・話題内容は目の前の場面についてのみであり、広がりが見られない。
- ・了解可能発話は非常に少なく、語彙も少ない。助詞は未だ見られない。発話はすべて1語文である。

[第2レベル] A～C児については3歳台に当たる。

- ・簡単なコミュニケーション（やり取り）ができ始める。
- ・まだ目の前の場面の話題が中心であるが、身近な物や人については目の前になくても話題にできる。
- ・了解可能発話が増え、異なり語彙数も2桁になり、助詞が使われ始め

る。2語文が現れ、平均発話長が伸びる。

[第3レベル] A～C児については4歳～6歳未満に当たる。

- ・一つの話題で長くやり取りができるようになる。しかしまだ言語力不足のため、母親の拡充模倣や子供への口声模倣の促しが含まれている。
- ・生活経験の話題が中心になる。
- ・了解可能発話が全発話中半分以上になる。異なり語彙数も50を越え、助詞が増える。3語文、4語文が見られるようになり、子どもによっては5語文以上の文も見られる。

[第4レベル] A～C児については6歳～9歳台にあたる。

- ・母親の拡充模倣や子どもへの口声模倣の促しなしの自然な会話が続く。
- ・知識や想像の話題が中心になる。
- ・ほとんどが了解可能発話になり、異なり語彙数も100近くかそれ以上になり、子どもによっては200を越える。助詞も2桁台使われるようになる。5語文以上の多語文が見られ、平均発話長が長くなる。

これら4レベルの言語活動面は、斎藤（1988）の健聴児をモデルとした言語活動の5段階のうち、はじめの3段階とほぼ内容が一致していた。すなわち、第1レベルが斎藤（1988）の第1段階に、第2・第3レベルが第2段階に、第4レベルが第3段階にそれぞれ相当する。この事は、斎藤（1988）が聴覚障害児については、それぞれ第1段階は0～2歳児、第2段階は幼稚部3・4歳児、第3段階は幼稚部の最終段階から小学部低学年での到達を目標にしている事にほぼ一致する。

D児についてはA～C児に比して第1レベルに長い時間がかかっていることが、全体の遅れをもたらしている。但し、時期は遅れるが、言語活動面の変化と言語力面の変化が同時に段階的に起こっており、その言語発達は大きく3レベルにまとめる事ができた。それぞれA～C児の第1レベルから第3レベルに相当する結果になっている。この事は、その発達の早さには個人差があるが、発達のプロセスとしては同様であるという事を確認させる結果である。

言語活動面の変化と言語力面の変化が同時に起こっているというこの結果は、言語力を高めると共に言語活動を高めて行く指導の必要性を示唆するものである。以前の聾教育に於ては、言語力面のみが強調され、教師や親はともすると、子どもとの関わりに於て言語を教え込む事のみ心奪われがちであった。1970年代から「自然法」という名称で、プログラムに則して言語を習得させるのではなく、健聴児の言語発達と同じように、日常生活に於て必要とされる言語活動を遂行する中で言語を獲得していくことが望ましいとして、子どもの心、興味や経験に則した指導が行われるようになって来ている。今回の対象児も、非常に早期から補聴器を装用して自然法的アプローチで指導を受けてきた子ども達であり、その結果、言語力だけでなく、言語活動というより広い観点から見ても、ほぼ健聴児に似た段階を踏んで言語が発達していくことが確認されたと言える。但し、D児の例から言えるように、発達初期からの躓きがあり、かなり言語発達が遅れる例もあり、このような事例に対する配慮や対策を持つことが、「自然法」による指導を成功させる上で大切だと思える。

2. 事例ごとの考察

今回の分析結果を各事例ごとに考察する。特に、言語活動面ではA児、C児と同じような言語発達を見せているが、発話面にやや不安の残るB児についてと、言語発達全般に遅れの見られたD児について詳細に考察し、今後の指導方法について検討する。

(1) A児

会話成立水準の変化、話題内容の変化、発話の変化ともに段階的な発達を見せた。すなわち、0歳～2歳台の第1レベル、3歳台の第2レベル、4歳～6歳未満の第3レベル、6歳～9歳台の第4レベルが見られた。これは斎藤（1988）の第3段階までに当たり、小学部低学年で健聴児の幼児後期までの言語活動ができていることを示している。聴覚障害児としてはほぼ順調な言語発達であると思われる。対象児の資料（表2）で示したように、本児の場合、9歳時の文字言語力が学力検査、読書力検査とともに評価段階3と健聴児の平均レベルに至っており、従って幼児後期段階の話し言葉の発達の上に立って、読み書きの学習が順調に進んでいるといえる。この事から斎藤（1988）の第4段階に既に至っていると推察される。A児は話題内容において知識・想像の話題が現れるのが7歳と他児に比べて遅かったが、これは、A児は想像的な話題よりも、知識を得たり伝えたりする知的話題の方を好む傾向にあったため、知的話題が十分に理解できる年齢になるまで知識・想像の話題が出てこなかったものと思われる。しかし、想像的話題がまったく見られない（できない）わけではなく、母親の話しかけの内容にも因るのではないかと思われる。A児の場合、母親が意識してA児に知識を与えようとしている

面があり、知的话题が多くなっているが、この点については母親指導により改善できるであろう。

(2) B児

会話成立水準の変化、話題内容の変化ともに0歳～2歳台の第1レベル、3歳台の第2レベル、4歳～6歳未満の第3レベル、6歳～9歳台の第4レベルの段階的発達を見せた。会話成立水準が示すやり取りの完成度は高く、話題内容も年齢相応であると思われる、言語活動面ではA児同様、聴覚障害児としては順調な言語発達であると思われる。しかし、発話の変化についてはA児、C児と比して必ずしも順調な結果とは言えない。この事は表2の対象児の文字言語力に反映しており、学力検査は評価段階3であるが、読書力検査が評価段階2とA児、C児よりも低い段階である。

B児は聴力的に一番厳しく、特に左耳については補聴器をつけていてもほとんど音の聞き取りができず、右の補聴器が故障すると「聞こえない。」と訴え、反応が悪くなる子どもである。その一方、常に注視する姿勢が身に付いており、かなり読話で話を理解していると思われる子どもであった。

B児の言語力面の問題として次の2点が挙げられる。

第1点は、発話数が少なく、発話長も短く、異なり語彙数も少ないといった、量的な乏しさである。B児の母子の会話のテープを聞くと、A児、C児に比べて発話が少なく、活発なやり取りではない事が分かる。この事がB児の異なり語彙数の伸びがA児、C児に比べて芳しくない原因であるとも考えられる。また、表10-2及び図6-2から2語文以上の連語文が現れる時期はA児、C児とそれぞれ変わらないが、比率で見ると

9歳時に至るまで1語文が多く、そのため平均発話長の伸びがあまり見られないといったB児の発話の特徴も指摘できる。これらの事を改善するには、ともするとあまりに良く分かり会えるために簡単な言葉でのやり取りになってしまい、無口なため静かなやり取りになってしまう母子の会話を活発化させる事が考えられる。母親に対し、簡単な言葉で済まさない、新しい言葉をどんどん使って興味を持たせたり、母子でその意味を考えてみる、ある面演技するように大袈裟に驚いたり笑ったり褒めたりして子どもの話したい意欲を高める、などの指導が必要だと思われる。

第2点は、構文の整い方が遅れたことである。構文の整い方の指標として助詞数の変化(図5)を見ると、A児、C児に比べて4歳～7歳間の伸びが少なかった。しかし、7歳から8歳にかけて飛躍的な伸びを見せ、8歳及び9歳ではA児、C児と大差ない結果になっている。これは、聴力的に厳しいため、日常会話の中では聞き取りにくい助詞がなかなか身に付かなかったが、小学部に入り文字言語に多く触れるようになったことによって、日本語の構文が整ってきたものと推察される。また、異なり語彙数が少ないながらも、品詞別に見ると、接続詞や助動詞はA児、C児に比べあまり遜色なく身に付いている。今後B児に対する指導としては、読書や日記、作文といった読み書きの活動を更に促し、文字言語により聴覚的な厳しさをしっかりサポートする事が必要であろう。

(3) C児

会話成立水準の変化、話題内容の変化、発話の変化共に0歳～2歳台の第1レベル、3歳台の第2レベル、4歳～6歳未満の第3レベル、6歳～9歳台の第4レベルの段階的発達を見せた。A児同様小学部低学年

で健聴児の幼児後期までの言語活動ができており、聴覚障害児としては順調な言語発達であると思われる。この事は、表2の9歳時の文字言語力が、学力検査は評価段階4、読書力検査は評価段階2（+）であることにも反映されており、斎藤（1988）の第4段階にも既に入り始めていると思われる。特にC児は発話の変化において、よい発達を示している。全発話数が多く、異なり語彙数もほぼ順調に増え続け、8歳時には200を越えている。接続詞の数が多いのも特徴である。平均発話長も年々長くなり、9歳時には3.69になっている。C児の母子の会話のテープを聞くと、C児が非常におしゃべりで、会話を楽しみながら、次々に話題を提供していることが分かる。この事は、表5-3 C児 会話成立水準別時間数を見ても、4歳以降子どもからの開始の偶数番の型（8型或いは10型）が圧倒的に多い事から裏付けられる。また、C児は話題内容の変化でも4歳時と早い時期に知識・想像の話題が現れている。これは、C児が性格的に早熟であり、早くから少女らしい空想を楽しんでいたためと思われる。

（4）D児

ほぼ順調な言語発達を見せていたA～C児に比べ、D児は会話成立水準、話題内容、発話のすべての面において、言語発達の遅れが顕著だった。しかし、D児はD児なりに段階的な発達の様相を示していることも明らかになった。すなわち、会話成立水準の変化、話題内容の変化、発話の変化のすべての面で0歳～6歳未満、6歳～7歳台、8歳～9歳台の3レベルが見られた。内容的には、それぞれA～C児の第1レベル、第2レベル、第3レベルに当たるとと思われる。ここで特に問題として顕著なのが、0～6歳未満という第1レベルの長さである。つまり、D児

は第1レベルから第2レベルへの変化において躓いたと思われる。

D児は表1から、知能検査結果はA～C児と大差なく、図1-4から聴力もA～C児とほぼ似たような聴力レベルであると言える。D児が会話が続かず、話題も目の前の場面から広がることなく、了解可能発話がほとんどなくすなわち語彙もほとんどない状態から、なかなか変化することがなかったことについては、幾つかの理由が考えられる。

① D児の躓きの原因として考えられる事

母親との会話成立水準の分析結果から

- ・ 会話未成立の時期は、どの対象児の場合も初期の一定期間は続くが、その時期も母親からの話しかけ（1型）が、A～C児ではかなり多い。しかし、D児の場合、母親からの話しかけの絶対量が他児よりかなり少ない。
- ・ D児の場合、会話成立型が多くなった後も（6歳以降）、会話未成立型（1、2型）つまり擦れ違いの会話が残っている。
- ・ 子どもからの発話で始まり、2往復までで終わる（C→M, C→M→C, C→M→C→M）という会話型（4型）は、他児に比べてむしろ多い方であるが、そこで切れてしまう状態がかなり長く続いている。等という事が分かる。

これらの事は、母親の話しかけの絶対量が少ない事、母親が子どもとの会話のコツが掴めないこと、つまり子どもがせっかく働きかけても、子どもの興味を繋ぐような受け止めがうまくできない事を示していると思われる。次に示す例のように、一応、子どもの発話を受容的に受け止めてはいるが、それを発展させる働きかけが出てこず、また口声模倣の促しもなく、そこで終わってしまう場合がかなり見られた。

〔例1〕子ども

ポイ

母親

ポイって？ふーん。

〔例2〕子ども

アーイ、パパ、アッア

母親

パパだめなの？

パッ、ウー

ああそう。

また、母親がD児に十分に付き合ってやれず、少し遊ぶと「もうこれでおしまいよ。」とか「もう、幾つやったら気が済むの。」と言って、遊びを止めさせることも多かった。このような状態なので、いわゆるやり取りの続く楽しさは、母子ともに長い間経験できなかったといえる。

間接的原因として、

- ・補聴器の装用が、他児より少し遅かった事（他児は1歳前半、D児は1歳9か月）に加えて、母親の声も小さく、子どもの耳に十分に届いていたかどうか疑問に思われる事。
- ・姉が2人いて、良く世話をしていたので、日常生活であまり言葉のやり取りをする必要なく過ごしていたと思われる事（母親の話しや家庭訪問での印象）。
- ・母親の障害へのこだわりが長く続き、D児の成長を広くとらえることが困難だったらしい事。例えば、D児の言語発達の遅れの原因として、聴力が非常に悪いのだと思い込み、学校での聴力測定の結果を信頼で

きず、学校外で測定してもらって補聴器の調整を変えてきてしまう事もあった。

等も一応考慮すべきであろう。

更に、関連するD児の状態として、

- ・ A～C児に比べ、積極的に何かをわかろうとしたり、表現しようとする意欲が少なく、授業中も受け身で発言の促しにも内向するが多い。
- ・ 母親とアイ・コンタクトが十分に取れないまま話していることがあるため、口形の意識が十分に育っていないのではないかとと思われる。

等の事も指摘できるが、これらはむしろ会話成立水準の結果に現れたような、母子コミュニケーションの成立の不十分さや、D児の自己表現が受け止められて続いていくような、楽しい会話の経験が不足してきた結果ではないかと思われる。

以上のように、長期に亘るD児と母親との会話の分析結果は、聴覚障害児の場合についても初期の母子関係、母子コミュニケーションのあり方が、言語発達に大きく関わる事を示唆していると思われる。従って、このような例について、母親にコミュニケーションの成立を助けるアドバイスをしていくような、指導のあり方を考える事が是非とも必要であると思われる。また、間接的な原因として挙げた事についても、可能な限りアドバイスしていく必要がある。

② D児のような躓きの状態に対し、母親へのアドバイスとして考えられる事

D児が長い間、母親との会話が成立しない状態で、言語発達も遅れが

ちであった時期に必要であったと思われるアドバイスとして、次のような事が挙げられる。D児の場合、実際にアドバイスは行われたが、母親の変化に繋がらなかったとも考えられる。しかし、D児のような例は聴覚障害児として決して例外的ではないので、一般的に、このような状態が続いた場合のアドバイスとして考える。

コミュニケーションを成立させるためのアドバイスとしては、

- ・初めのうちはD児が応じなくても、通じる事を信じて、多くの語りかけをする事。
- ・D児の顔を見て、繰り返し優しく話しかける事（アイ・コンタクトが取れるように）。
- ・D児の興味に合わせる事。子どもと共感し、子どもと同じものに注目する事。
- ・子どもからのサインを、発声にしる身振りにしる表情にしる、どんな小さなサインでも見逃さず、答えていく事。
- ・子どもが興味を持ち、話がしたくなるような設定を作る事。

等が挙げられる。これらの事を母親に口頭で伝えるだけでなく、教師が実際にモデルを示して、理解してもらう必要があるだろう。

また、間接的原因に対するアドバイスとしては、

- ・はっきりした声で、補聴器の近くで話しかける事。
- ・家庭生活の中でも、D児にことばで話しかけ、D児もことばを使っていく事が大切なのだと説明し、家族に協力してもらう事。
- ・母親は、D児の聴力に対する拘りが長く続くなど、精神的に不安定である時期が他児の母親より長く続いた。そのような時、母親が他児と

の比較ではなく、D児の発達をできるだけ客観的にとらえ、当面の課題をD児に則して考える事ができるよう、教師は母親を支え、共に考える役目を担わなければならない。母親との協力的関係を作る事が、子どもの言語発達を進める出発点になる。

という事が考えられる。

③現時点のD児に対し考えられる指導

次に、現時点のD児について考えられる指導を、会話成立水準、話題内容、発話の3面から考える。

[会話成立水準]

母親の拡充模倣や子どもへの口声模倣の促しなしの会話成熟型の会話成立水準に至るには、まだかなり時間がかかると思われる。D児の現段階としては、会話持続型の会話で多くの会話をし、会話を続ける習慣を身に付け、その中で言語力を伸ばすために、母親や教師はD児の不十分な表現を正しい日本語で言い直して拡充してやり、確実に口声模倣させる必要があるであろう。

[話題内容]

自分の書いた漫画の登場人物の説明をするなど想像の話題が少し現れてきている（8歳）が、まだ生活経験の話題が主であり、知識の話題はまったく見られなかった。しかし、知的に障害があるわけではないので、言語力は不十分ながらも、年齢相応の知的話題に興味を持たせていくことは必要であると思われる。生活経験の話題で十分に身近な言葉を使って会話していくと共に、新聞や図鑑、科学絵本や写真雑誌等を使った会話も心掛けて行く必要がある。また想像的な絵や絵本で話をしたり、4

コマ漫画のような起承転結のある絵を使って「もしも……なら」「続きはどうなるのかな」「Dちゃんだったらどうする」「どうして」といったいわゆる「開いた質問」をして考えさせることも必要であると思われる。言語力が不十分な子どもの場合、ともすると家庭での会話は目の前の事と生活経験に終始しがちだが、D児の現在のレベルから考えると、学校での指導に加え家庭でも少し意図的に多彩な話題を大人の側で提供していく必要があると思われる。

〔発話面〕

了解可能発話については一応8歳時にほとんどが了解可能発話になっているので、より明瞭度を増すために発音指導をする必要はあるが、大きな問題はない。異なり語彙数については、何ととっても絶対数を増やす必要があり、絵カードや聞き取りテープを使って少し構造的な言語指導をする必要があると思われる。しかし、D児の異なり語彙の内訳を見ると名詞が多く動詞が少いといったバランスの悪さが指摘できる。また、接続詞はまだ1つも出てきておらず、日本語の構文が整っていないことが分かる。絵カード等を使った言語指導をするとそのようなバランスの悪い言語習得になりがちなので、特に動詞や接続詞に注目した指導をし、日常生活の中でも周囲が繰り返し使っていく必要があると思われる。発話長については5語文以上の多語文も現れつつあるので、活発な会話を促しながら、より長い言葉で話すように周囲が要求していく必要があるだろう。

V. まとめ及び今後の課題

本研究では、早期から聾学校で指導を受けてきた聴覚障害児4名について、乳幼児期から9歳までの各年度に録音されてきた、家庭における母子の自由場面会話のカセットテープを用いて、会話成立水準の変化や話題内容の変化といった言語活動面と、発話（発話数、異なり語彙数、平均発話長）の変化といった言語力面の2側面から分析を行った。その結果、言語活動の発達と言語力の発達とが、同時期に対応した段階的变化を見せていることが分かった。その発達の段階は、A～C児では共通した4レベルが見られた。但しその中でB児については、言語力面では少し発達に遅れが見られた。またこれら4レベルの言語活動面は、斎藤（1988）の健聴児をモデルとした言語活動の5段階のうち、最初の3段階とほぼ内容が一致していた。故に、A～C児の言語活動の発達は、健聴児に時期は遅れるが同様の発達段階を辿っていると思われた。Clark（1989）も、聴覚障害児の言語発達は発達の遅速はあるが、健聴児の言語発達と同様の発達のプロセスを辿るとしており、それらの見識を裏付ける結果であると思われる。

しかし、D児については、言語活動面からも言語力の面からも言語発達に遅れが見られた。但し、時期はずれているが言語活動の変化と言語力の変化が同時期に段階的に起こっていることには変わりはなく、A～C児の第3レベルまで至っていることが分かった。また、事例の検討から、A～C児に比してD児の言語発達が遅れたのは、第1レベルに時間がかかっていたためであることが分かった。この事は、初期の母子関係の大切さを確認させる結果であり、初期の母子コミュニケーションが成立するための、具体的な支援の必要性が改めて示唆された。

今後の研究を進める上では次のような課題があげられる。

- ①今回は資料がカセットテープであるため、音声言語のみの分析に限られ、表情や身振り・動作といったノン・バーバルなコミュニケーション行動を考慮に入れることができなかった。乳児期の母子相互作用研究では特に言語に拘らず、広く行動学的観点からコミュニケーションを記述する必要があると思われる。この点については、家庭での自由場面の母子の会話ということで困難はあるが、今後はVTRを使って記録し、分析していく必要があると思われる。
- ②今回は、言語活動の分析方法として、会話成立水準の変化と、話題内容の変化について分析した。さらに、母子の発話の機能の変化を分析する必要があると思われる。
- ③今回は9歳までの母子の会話を分析し、その結果A～C児はほぼ順調な言語発達を見せていることが分かった。今後の課題としては、聾教育に於ては長年「9歳の峠」或いは「9歳の壁」と言う言葉で、学力が小学校3～4年生段階で停滞してしまう聴覚障害児が多く、その原因を言語力の不足とする意見が言われている。森（1992）は、「9歳の壁」打破のためには、6歳（就学児）頃のスピーチの能力が鍵になっていると述べている。また斎藤（1986）は、健聴児の幼児後期の言語活動に当たる「第3段階」の言語活動に、学習を支える言語活動の芽があり、この段階の言語活動を豊富にかつ円滑に展開させることが、教科活動の前提条件になり、「9歳の峠」に先立つ不可避の道程だとしている。A～C児では、斎藤（1988）の第3段階に相当する第4レベルの言語活動が既にできている。それらの事を考えあわせると、A～C児に於ては「9歳の壁」の問題は余り現れないと予想できるが、そ

の検証が必要であろう。

またD児については、最初の段階の躓きが長く続いたが、現在はA～C児の第3レベル、斎藤（1988）の第2段階までに至っているものと思われる。しかし、言語発達の遅れの見られる子どもの場合、この先も時期は遅れるが順調な発達の子と同様の段階まで至るのか、どこかで発達が停滞するものなのか、それとも違った言語発達の筋道を辿るものなのかを追跡すると共に、このような事例に対する指導法をさらに検討して行く必要があると思われる。

- ⑤ 今回の研究では、重複障害のない聴覚障害児のみを対象児とした。そして、聴覚障害児の言語発達は、遅い速いはあるながら、健聴児の言語発達モデルと同様の発達を見せることが確認できた。しかし、知的問題や行動上の問題を持つ重複障害の聴覚障害児の場合は、今回明らかになった言語発達の指標では、第1レベルに非常に長い間とどまり、発達が停滞しているように見える場合が多いと考えられる。また、重複障害の子どもによっては、言語活動面の諸項目と、言語力面の諸項目が必ずしも連動して変化せず、諸項目の発達にかなりのばらつきが見られることも予想できる。そのような子どもへの指導を考える場合は、健常児をモデルとする指標をあてはめ、次の段階への到達のみを追求することは、子どもに適当でない課題を押し付けることになり兼ねない。話しことばの成立は複雑な要因のからみあいの中で、多様な能力の統合の結果として可能になる。諸機能の発達の複雑な絡み合いとずれを見る中で、個々の子どもの発達の多様な在り方を、そのありのままの姿で見えていくことが、まず必要だろう。あくまでも子ども全体と、子どもを巡る環境全体に目を配ることが、指導に当たる教師や親に必要である。今後聾学校で増えていくであろう重複障害児への対

応を考えると、今回明らかにされた言語発達の段階の指標より、さらに細かい段階的発達を明らかにする必要がある。その場合は、当然非言語的コミュニケーション手段も考慮に入れなければならないだろう。

文 献

- (1) 中馬 修 (1989) : 幼稚部 4 歳児クラスにおける授業記録分析の
試み－話し合い活動を中心として－. 平成元年度 筑波大学内地
留学生報告書
- (2) Clark, M. (1989) : Language through Living for hearing-
impaired children . Hodder and Stoughton
- (3) 土井由美子・前園幸子・清水充子 (1987) : 高度難聴児の語いの
発達について. Audiology Japan, 30 (5). 83-584
- (4) 榎本幸子・野中信之・中川 弘・川野通夫・中島 誠 (1988) :
高度難聴児のことばの基盤について. Audiology Japan , 31 (5)
635-636
- (5) 藤田和加・草薙進郎 (1989) : 聴覚障害幼児のコミュニケーション
行動の発達に関する研究. 日本特殊教育学会第25回大会発表論
文集, 64-65
- (6) Gesel, A. (1940) : The first five years of life. Methuen
- (7) 後藤 守 (1974) : 相互作用の分析法の検討－乳幼児発達研究法
の探求 (2) . 北海道大学教育学部紀要, 23, 41-66
- (8) 後藤 守 (1976) : 母子言語関係の成立過程に関する研究 (I)
－ダウン症候群の幼児と母親の言語関係の分析を中心として－.
北海道大学紀要第1部C, 26(2), 9-21
- (9) 日笠摩子 (1983) : 話しことばの獲得についての研究動向－こと
ばを話すまで・話しはじめる時. 障害者問題研究, 34, 86-93
- (10) 星 龍雄他 (1987) : 聴覚障害児用補聴システムの設計・試作
とその実践的評価に関する研究. 昭和61年度科学研究費補助金

研究成果報告書

- (11) 今井秀雄・星 龍雄 (1967) : 早期教育を施した難聴幼児の言語発達. *Audiology*, 10, 132-133
- (12) 今井秀雄 (編著) (1989) : 聴覚活用ハンドブック. 財団法人心身障害児教育財団
- (13) 古賀慶次郎 (1991) : 聴覚障害児の医学. 小川 仁・谷 俊治・出口利定 (編), 聴覚障害児の診断と指導. 学苑社, 153-177
- (14) 河野章子・野中信之・中川 弘・川野通夫・中島 誠 (1987) : 難聴児の指導 (1) - 運動や遊び、言葉の発達を中心に その2 -. 日本特殊教育学会第25回大会発表論文集, 46-47
- (15) Lloyd, L. L. (Ed) (1976) : *Communication assessment and Intervention strategies* . University Park Press
- (16) 松本末男・椿 優子 (1989) : 聴覚障害幼児と母親・教師との対話分析. 日本特殊教育学会第27回大会発表論文集, 40-41
- (17) 森 寿子 (1992) : 重度聴覚障害児のスピーチの獲得 - 9歳の壁打破 聴能訓練法からの挑戦 -. にゅーろん社
- (18) 村井潤一 (1981) : 言語発達研究の諸問題. 発達障害研究, 3 (1), 1-16
- (19) 村田孝次・大原董子 (1965) : 言語行動の発達Ⅶ - 1才児との“対話”における母親の役割 -. 心理学研究, 37 (2), 67-73
- (20) Musselman, C. & Churchill, A. (1991) : *Conversational Control in Mother-Child Dyads* . *American Annals of the Deaf*, 136 (1), 5-16
- (21) 長崎 勤 (1988) : ことばの獲得とその指導. 飯高京子・若葉

陽子・長崎 勤（編），ことばの発達の障害とその指導．学苑社，105-126

（22）中野善達（編著）（1991）：聴覚障害児の早期教育．福村出版

（23）野中信之・中川弘・中島誠・川野通夫（1989）：難聴幼児のことばの指導．*Audiology Japan* , 32 (5), 497-498

（24）岡本途也（1982）：聴覚障害児の早期発見・早期療育の必要性に対する医学的考察．*日本小児科学会雑誌* , 86 (1), 1-6

（25）大森千代美・高橋伴子・中川 弘・川野通夫・中島 誠
（1987）：難聴児の指導（2）－母と子のかかわりと、言葉の発達を中心に その2－．*日本特殊教育学会第25回大会発表論文集* , 47-48

（26）斎藤佐和（編著）（1986）：聴覚障害児童の言語活動．聾教育研究会

（27）斎藤佐和（1988）：発達の言語指導論の試み．星 龍雄・斎藤佐和（編），*重度聴覚障害児の教育－星研究室17年の成果－*，聾教育研究会，125-134

（28）清水美智子・八木由美子（1975）：家庭場面でのろう幼児の母子対話の実態に関する研究（Ⅰ）．*ろう教育科学* , 17 (2), 53-82

（29）清水美智子・八木由美子（1976）：家庭場面でのろう幼児の母子対話の実態に関する研究（Ⅱ）．*ろう教育科学* , 18 (1), 5-22

（30）清水美智子・八木由美子（1976）：家庭場面でのろう幼児の母子対話の実態に関する研究（Ⅲ）．*ろう教育科学* , 18 (3), 101-130

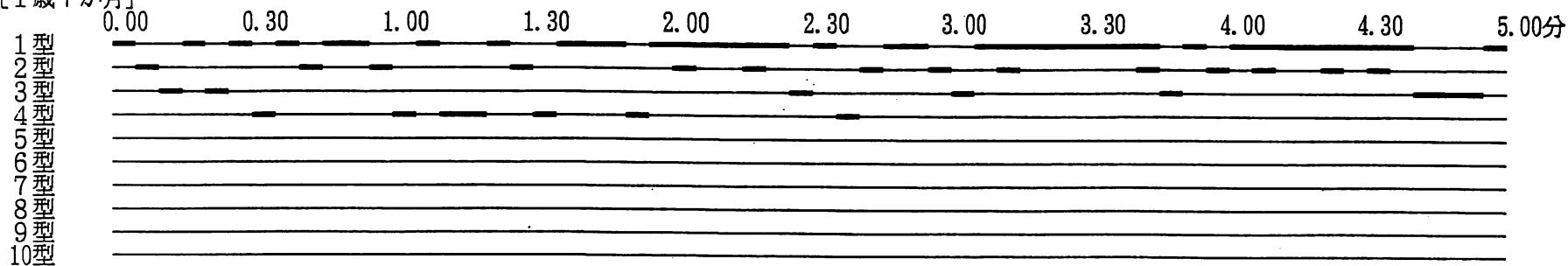
- (31) 清水美智子・八木由美子 (1977) : 家庭場面でのろう幼児の母子対話の実態に関する研究 (IV) . ろう教育科学, 19 (1), 5-38
- (32) 庄司留美子 (1987) : 高度難聴児のことばの発達 (2) - 2才までの対人関係の発達と伝達行動 -. 日本教育心理学会第29回大会発表論文集, 1042-1043
- (33) 庄司留美子 (1990) : 高度難聴児のことばの発達 (4) - 2才から4才までの対人関係の発達と伝達行動 -. 日本教育心理学会第32回大会発表論文集, 207
- (34) 菅原廣一・小田侯朗・高屋隆男 (1986) : 高度難聴母子の対話分析. 日本特殊教育学会第24回大会発表論文集, 46-47
- (35) 田中美郷 (1973) : Home Training による90dB以上の難聴児の言語発達 その1. H. エミちゃんの場合. Audiology Japan, 16 489-504
- (36) Trevarthen, C. (1979) : Communication and cooperatioin in early infancy: a description of primary intersubjectivity. In Bullowa (Ed) , Before Speech, Cambridge University Press
- (37) 対馬真佐子 (1993) : 障害幼児の遊びと発話の関係に関する研究. 平成4年度筑波大学修士論文
- (38) 山田洋子 (1978) : 言語発生を準備する一条件としての三項関係の成立 (1) . 日本心理学会第42回大会発表論文集, 840
- (39) 山田洋子 (1980) : 言語機能の基礎. 心理学評論, 23, 163
- (40) 渡海三恵・高橋京子 (1986) : 聴覚障害児における母子コミュニケーションの事例研究. ろう教育科学, 28 (4), 204-208

資 料

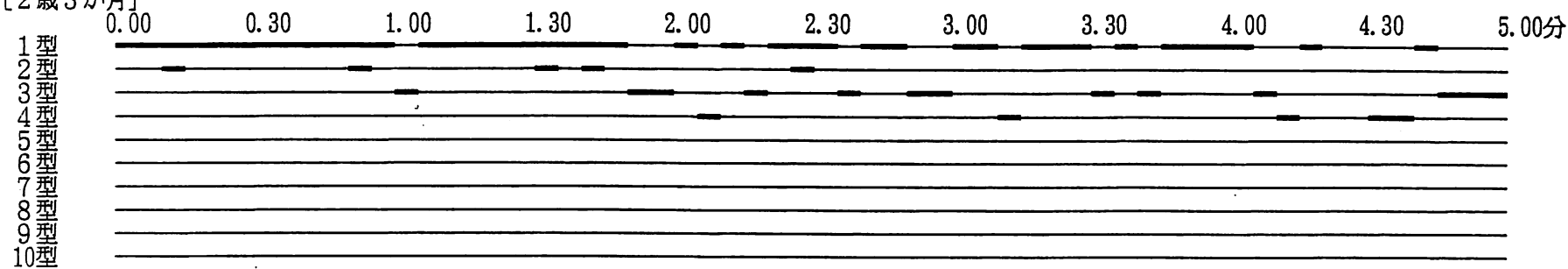
資料として、各事例の母子の会話を、時間系列を追って、会話成立水準分類カテゴリー（表4）に基づいて分類した結果の一部、15分間のうち最初の5分間の資料を添付する。資料中、破線（.....）で表したものは、歌を歌ったり、本を一人で読み上げたり、お祈りをしている会話でない発話である。分類対象からは外しているものであるが、沈黙ではない事を示すため、便宜上破線で表した。

資料1 A児 会話成立水準の時間的推移

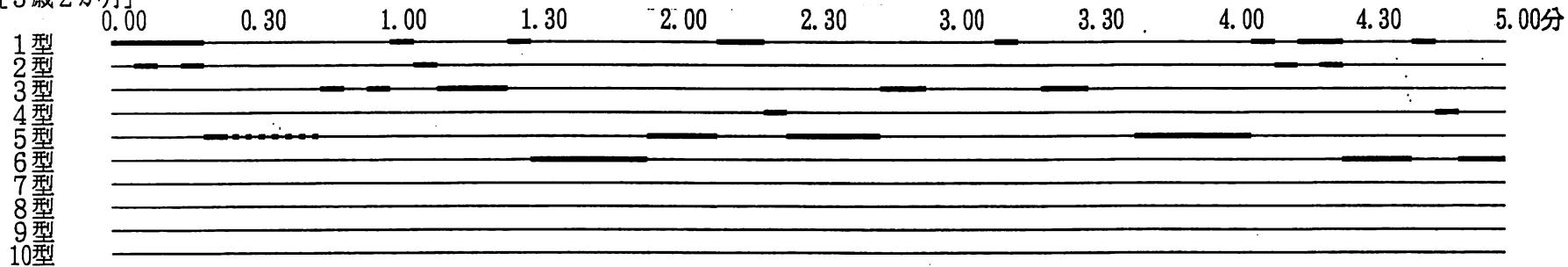
[1歳7か月]



[2歳3か月]



[3歳2か月]



[4歳3か月]

[illegible]

[6歳4ヵ月]

[illegible]

〔7歳3か月〕

[illegible]

[8歳1ヵ月]		0.00	0.30	1.00	1.30	2.00	2.30	3.00	3.30	4.00	4.30	5.00分
1型												
2型												
3型												
4型												
5型												
6型												
7型												
8型												
9型												
10型												

[9歳1ヵ月]		0.00	0.30	1.00	1.30	2.00	2.30	3.00	3.30	4.00	4.30	5.00分
1型												
2型												
3型												
4型												
5型												
6型												
7型												
8型												
9型												
10型												

資料 2 B児 会話成立水準の時間的推移

[1歳9か月]

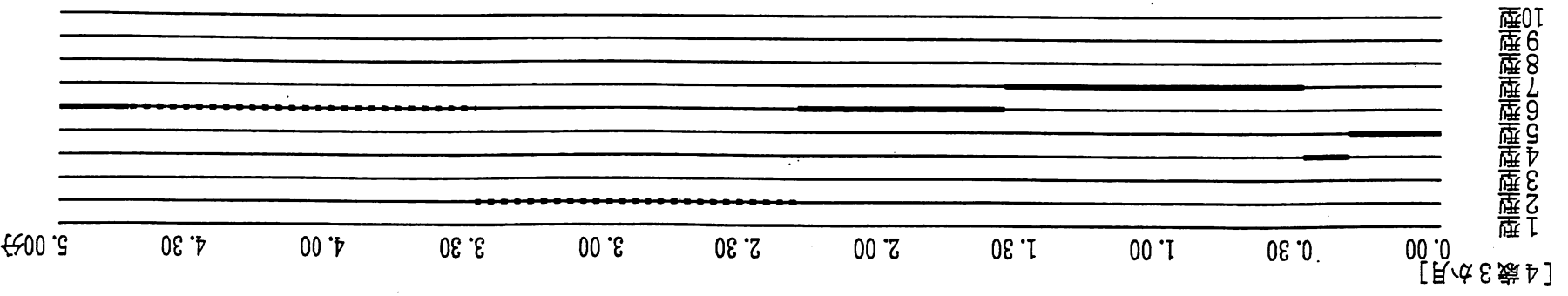
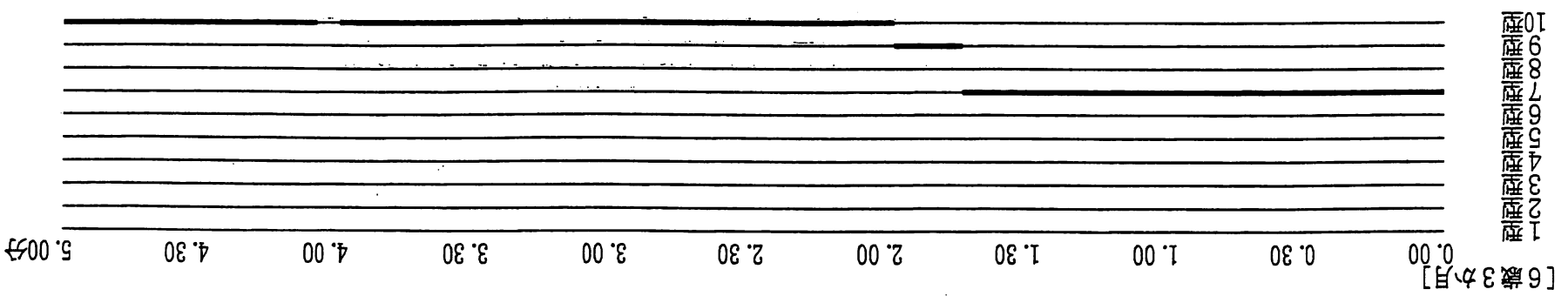
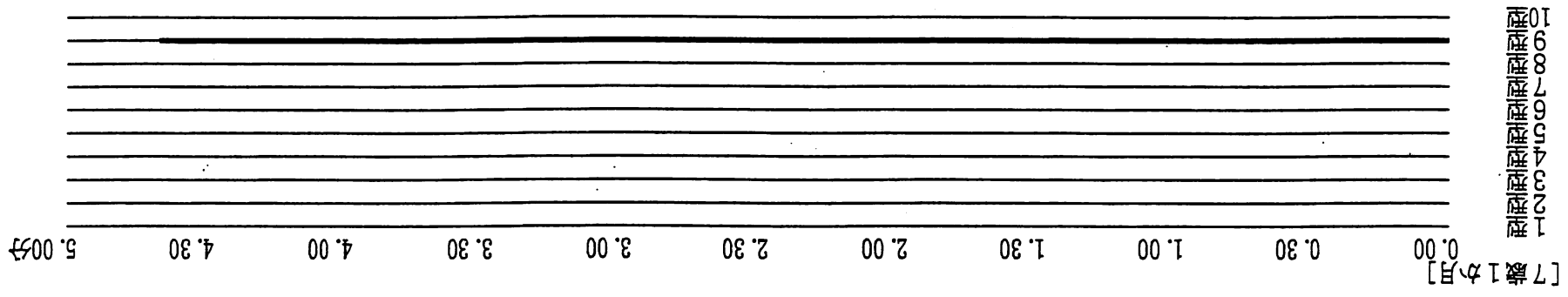
	0.00	0.30	1.00	1.30	2.00	2.30	3.00	3.30	4.00	4.30	5.00分
1型											
2型											
3型											
4型											
5型											
6型											
7型											
8型											
9型											
10型											

[2歳3か月]

	0.00	0.30	1.00	1.30	2.00	2.30	3.00	3.30	4.00	4.30	5.00分
1型											
2型											
3型											
4型											
5型											
6型											
7型											
8型											
9型											
10型											

[3歳2か月]

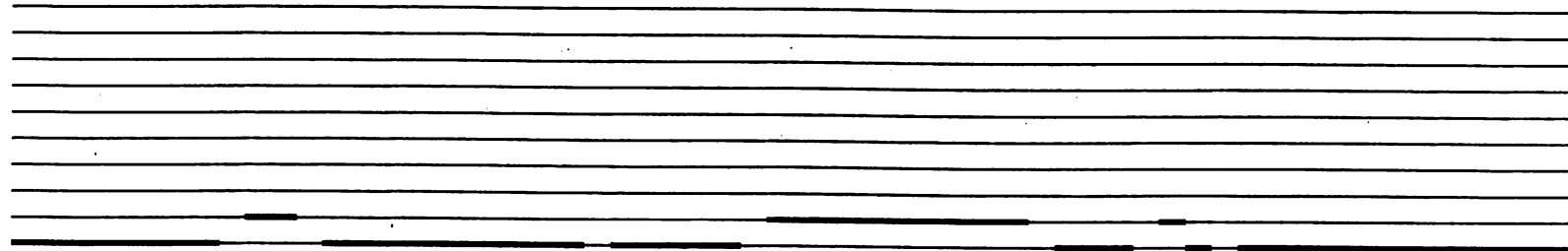
	0.00	0.30	1.00	1.30	2.00	2.30	3.00	3.30	4.00	4.30	5.00分
1型											
2型											
3型											
4型											
5型											
6型											
7型											
8型											
9型											
10型											



[8歳3か月]

0.00 0.30 1.00 1.30 2.00 2.30 3.00 3.30 4.00 4.30 5.00分

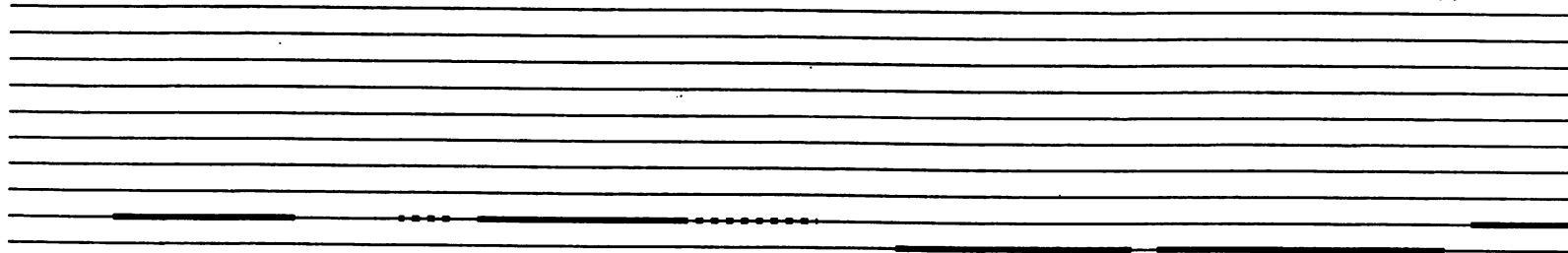
1 型
2 型
3 型
4 型
5 型
6 型
7 型
8 型
9 型
10 型



[9歳3か月]

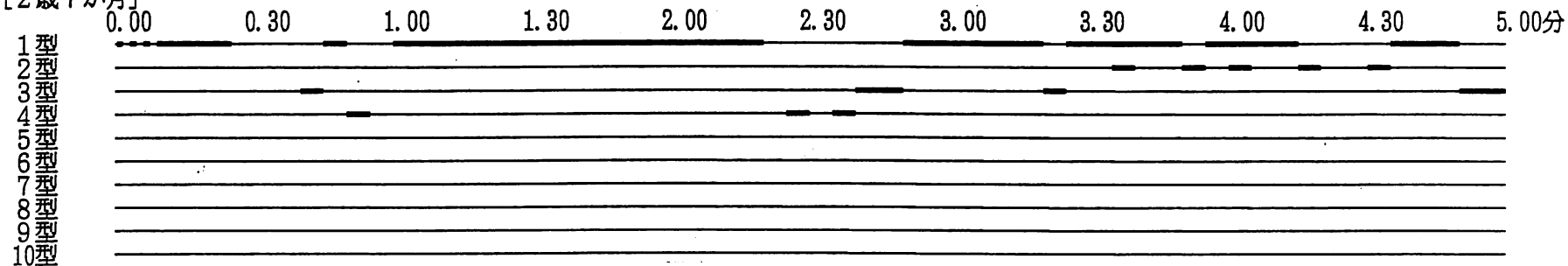
0.00 0.30 1.00 1.30 2.00 2.30 3.00 3.30 4.00 4.30 5.00分

1 型
2 型
3 型
4 型
5 型
6 型
7 型
8 型
9 型
10 型

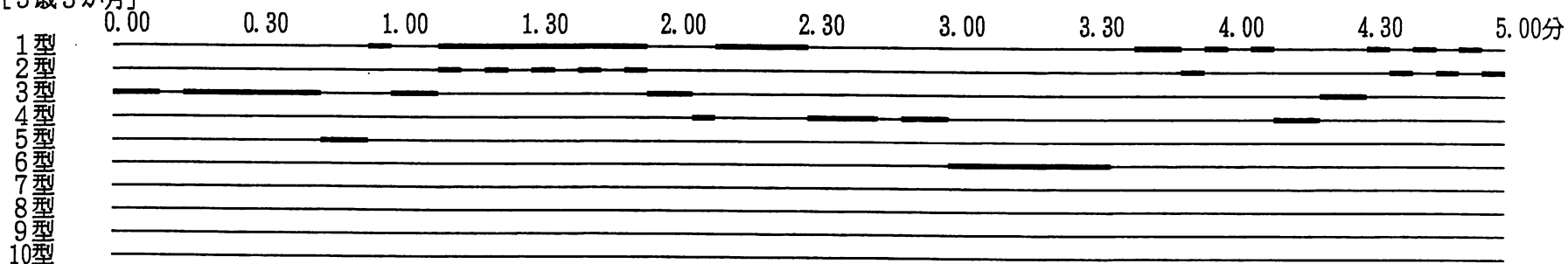


資料3 C児 会話成立水準の時間的推移

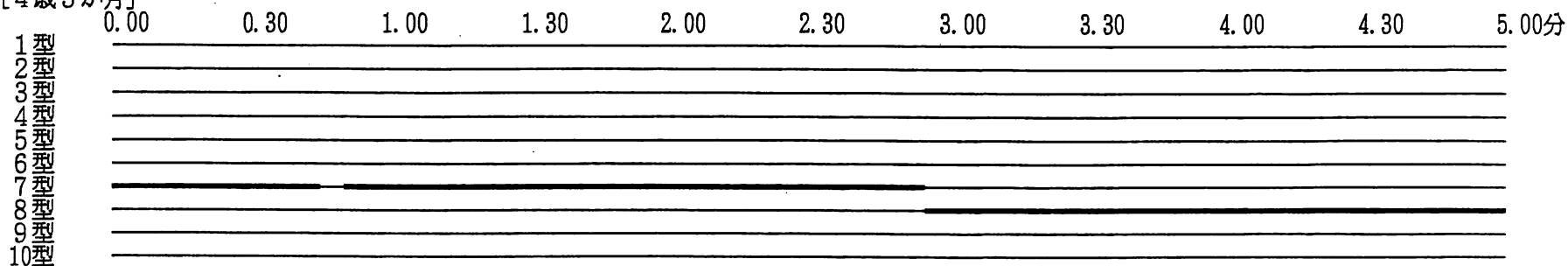
[2歳7か月]

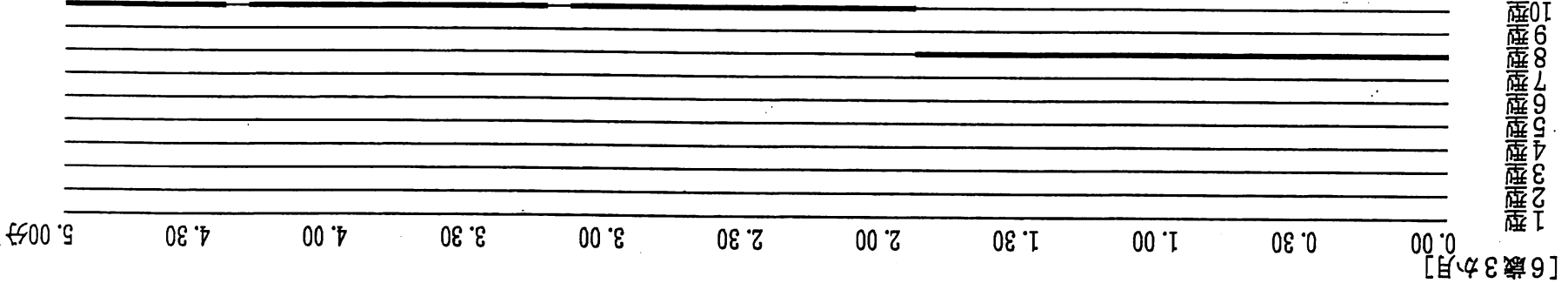
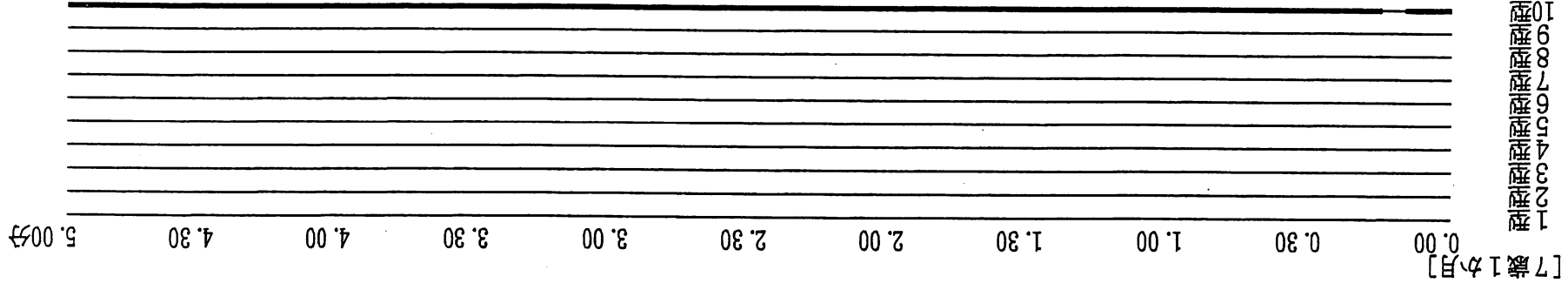
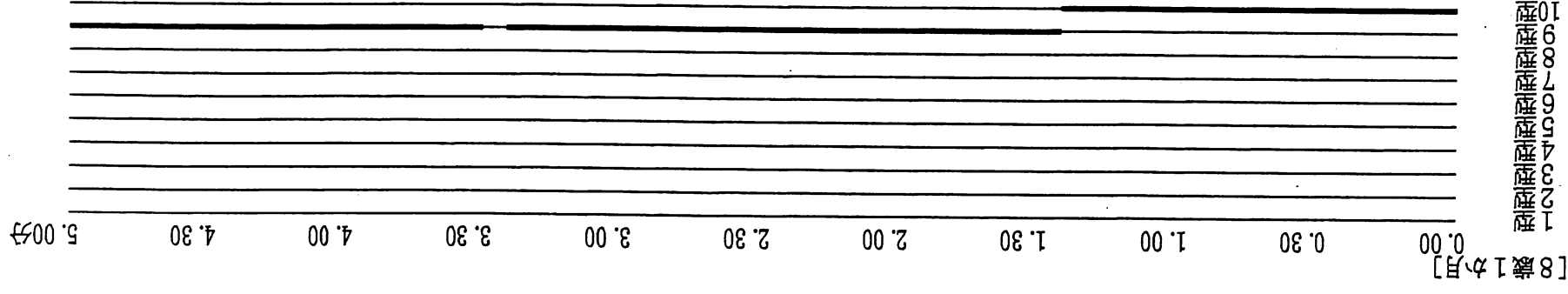


[3歳3か月]



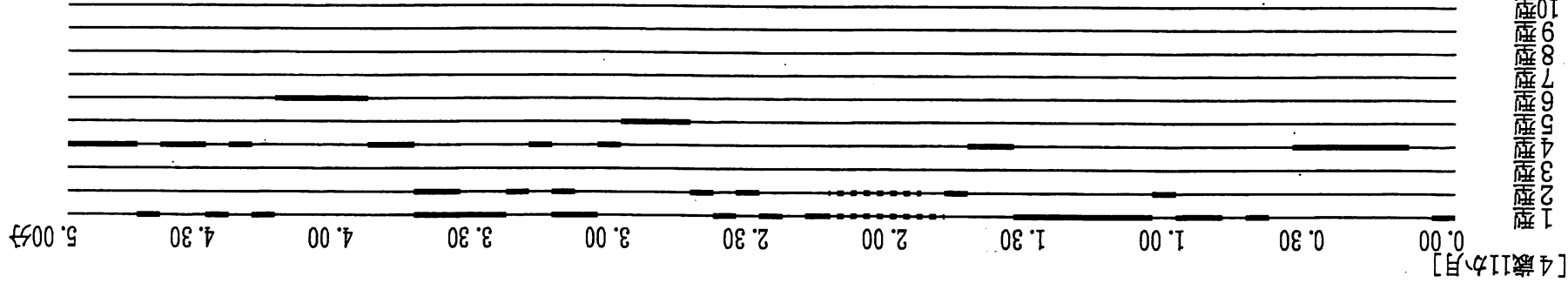
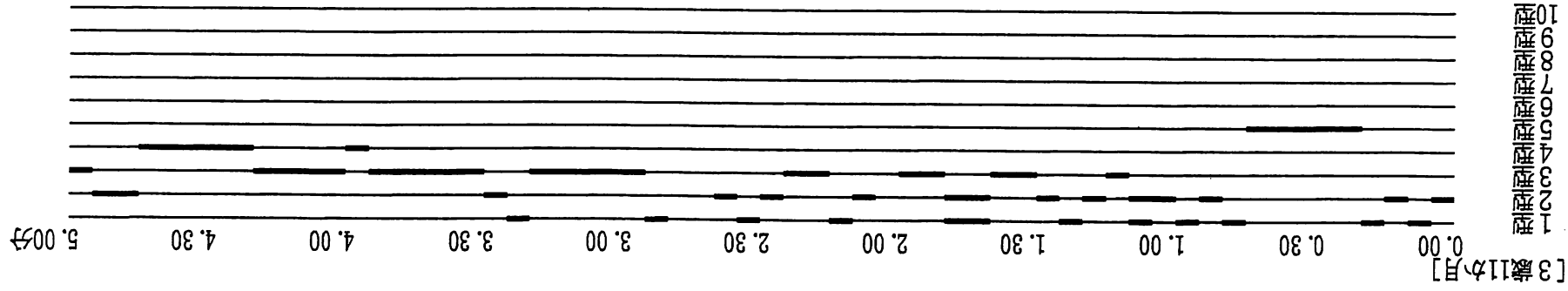
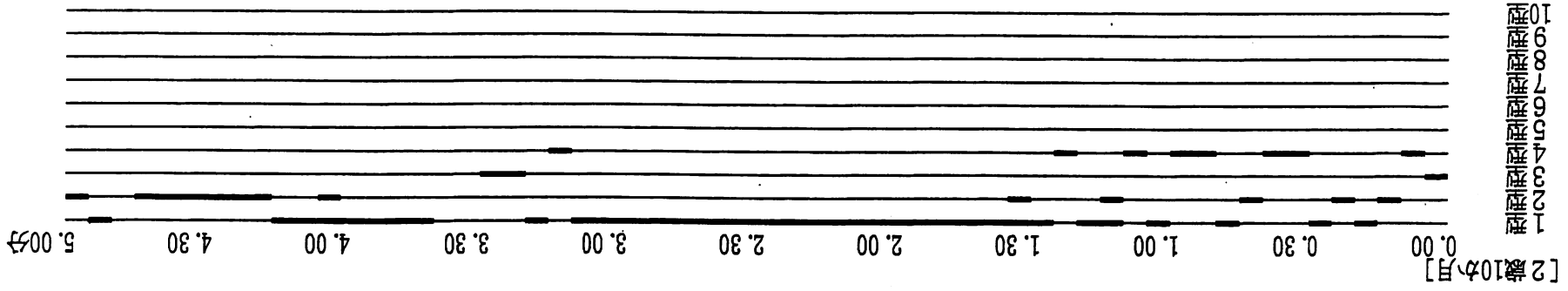
[4歳3か月]

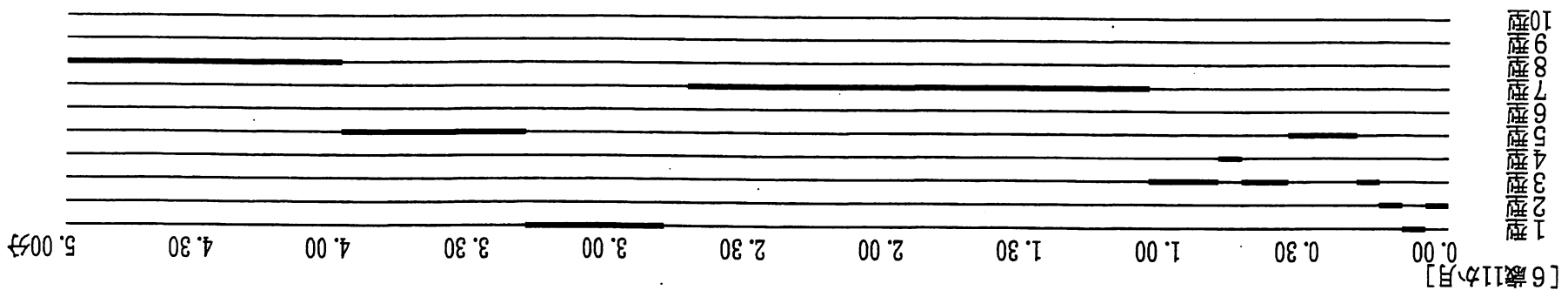
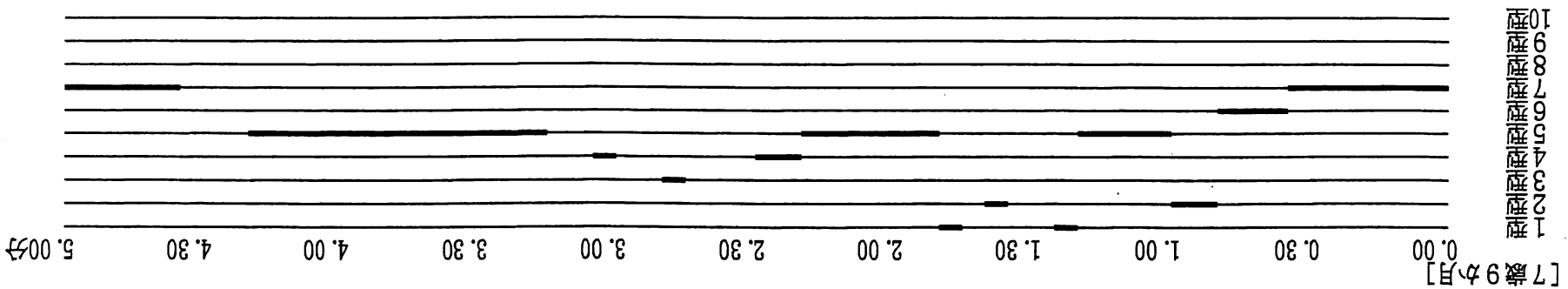
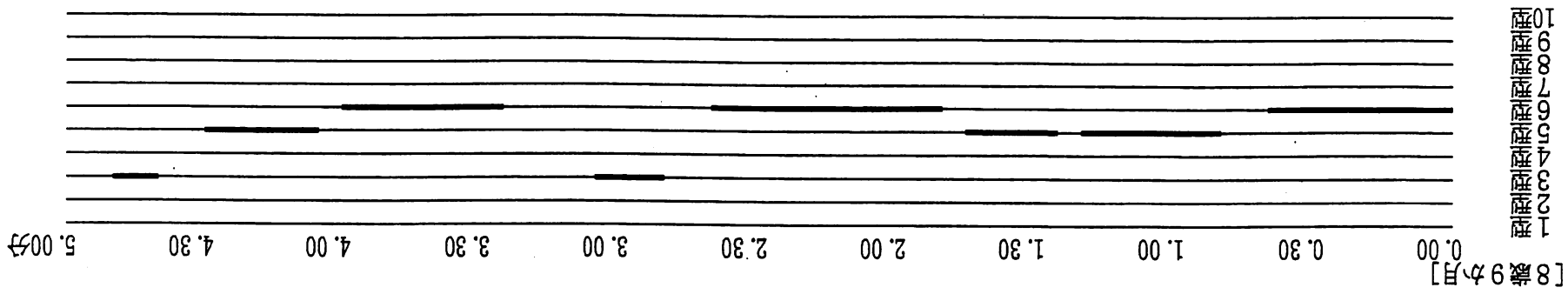




[9歳1ヵ月]		0.00	0.30	1.00	1.30	2.00	2.30	3.00	3.30	4.00	4.30	5.00分
1型	型											
2型	型											
3型	型											
4型	型											
5型	型											
6型	型											
7型	型											
8型	型											
9型	型											
10型	型											

資料4 D児 会話成立水準の時間の推移





[9歳9か月]		0.00	0.30	1.00	1.30	2.00	2.30	3.00	3.30	4.00	4.30	5.00分
1型												
2型												
3型												
4型												
5型												
6型												
7型												
8型												
9型												
10型												

謝 辞

本研究の実施にあたり、ご指導いただきました、筑波大学大学院教育研究科教授中野善達先生、同助教授斎藤佐和先生に心より感謝申し上げます。特に、斎藤先生には、研究計画から本稿の細部に至るまで詳細な御指導をいただきました。深く感謝を申し上げます。

また、筑波大学院教育研究科リハビリテーションコースの先生方には、数多くのご助言や励ましをいただきました。ありがとうございました。

本研究で分析資料として用いたカセットテープの使用を快く認めて下さった筆者の勤務校である日本聾話学校の校長先生、分析に協力して下さいました荒井真理先生をはじめ、終始暖かいご理解と協力して下さいました教職員の皆様に心よりお礼申し上げます。

3年間の期間に亘って支えてくれた家族にも感謝いたします。ありがとうございました。